

イギリス文学・文化論ゼミ

2016年度

海外語学研修・フィールドワーク報告書



<編者・報告者>

市橋 若菜・浦松 良多・小林 真紀・澤田 義典

友永 純菜・中村 さくら・西迫 真央・葉玉 直紀

2017年3月31日発行

まえがき

本報告書は、2016年度「イギリス文学・文化論演習」（加藤ゼミ）における、海外語学研修及び海外フィールドワークとその事前・事後学習をまとめたアクティブ・ラーニングの活動記録である。3年次生は8月にイギリスのバース大学にて **English Language and Culture** という語学と文化を学ぶサマーコースを2週間受講し、その後オクスフォードとロンドンにて1週間のフィールドワークを行った。「演習」とは別の時間に週1コマ、前期期間中に事前学習を行い、訪問先の文化、歴史、及び各自のフィールドワークにおける調査トピックに関する発表とディスカッションを行った。後期は、事後学習として調査トピックに関する追跡調査を文献やインターネットを通じて行い、「フランス文化論演習」（平松ゼミ）との合同発表会において、各自の調査研究に関する発表を行った。そして1年を通じたアクティブ・ラーニングの総括として、春休み中に本報告書を執筆、編集した。

編集作業と文献研究のために三浦海岸のホテルにてゼミ合宿を行ったが、その際に最新のTOEICスコアが825点であることが判明し、歓喜の声を上げる学生がいた。入学時のTOEFL-ITP 470点からスタートし、3年後期でのTOEIC 825点到達はかなりの上達ぶりである。本人曰く、「海外研修の成果」と言うが、3週間の海外経験で英語力が飛躍的に向上することはあり得ない。海外研修は自身の学習プロセスの一部に過ぎず、事前・事後学習を含めた普段の英語及び専門分野の学習の積み重ねが、英語試験の高得点に繋がったのである。ただ、イギリスでの経験がモチベーションとなり、その後の継続的な学習を支え続けたとは言えるだろう。その意味では、英語力の向上は本年度のアクティブ・ラーニングの目に見える成果の一つである。しかし、他にも目には見えない成果が参加者一人一人にはあるはずである。各自が将来それを顕在化することを期待したい。

加藤 千博

<旅程表>

日	月 日	行 程	訪問地	目的	宿泊
1	7/29	成田(17:25)発 →バンコク経由			タイ航空
2	7/30	ロンドン(7:15)着 →バース(バスで移動)	バース市内	移動、チェックイン	バース大学寮 (John Wood Court)
3	7/31	バース市内	バース市内	市内FW	バース大学寮 (John Wood Court)
4~8	8/1~5	バース大学	バース大学	サマーコース受講 (語学&文化研究)	バース大学寮 (John Wood Court)
9	8/6	レイコック(電車)	レイコック	ナショナル・トラスト管理地訪問	バース大学寮 (John Wood Court)
10	8/7	バース市内	ジェイン・オースティンセンター	文学・文化研究	バース大学寮 (John Wood Court)
11~15	8/8~12	バース大学	バース大学	サマーコース受講 (語学&文化研究)	バース大学寮 (John Wood Court)
16	8/13	バース→オクスフォード (電車で移動)	オクスフォード市内	市内FW	オクスフォード大学寮 (Keble College)
17	8/14	オクスフォード市内	ブレナム宮殿	宮殿見学 (歴史・文化研究)	オクスフォード大学寮 (Keble College)
18	8/15	オクスフォード市内	オクスフォード大学	コレッジ、本屋巡り	オクスフォード大学寮 (Keble College)
19	8/16	オクスフォード →ロンドン(電車)	大英博物館・ディケンズ博物館	歴史・文化・文学研究	ロンドン大学寮 (Passfield Hall)
20	8/17	ロンドン市内	オスタリーパーク・ハウス	カントリーハウス調査	ロンドン大学寮 (Passfield Hall)
21	8/18	ロンドン市内	ハー・マジェスティ・シアター	観劇	ロンドン大学寮 (Passfield Hall)
22	8/19	ロンドン(12:30)発 →バンコク経由	ロンドン市内 →ヒースロー空港		タイ航空
23	8/20	→成田(18:20)着			

Contents

1 . Preparatory Research	... 1
2 . Summer 2016 University of Bath English Language and Culture Course	... 15
3 . Field Work Presentations	... 19
4 . Results of “Brexit” Interviews	... 46
5 . The Diary	... 52
6 . Photos	... 60
7 . Reviews	... 65

1. Preparatory Research

Bath

The History

Roman Domination

- ◆50年 ローマ人が寺院建設
- ◆60～80年 バースの町の発展、“Aquae Sulis” 建設
神殿・大浴場の建設（現在のローマン・バース博物館）
- ◆250年 町の周りに石壁が築かれる
- ◆407年 ローマ人撤収、温泉の利用は続く



The Middle Ages～The 17th Century

- ◆885年 アルフレッド大王が要塞を築く
- ◆12世紀 the King's Bath 建設、治療効果のある温泉として利用
- ◆1539年 ヘンリ 8 世がバース修道院閉鎖
- ◆1590年 エリザベス 1 世の公認 “Queen's Bath”
- ◆17世紀 温泉地として有名に

Georgian Era (1714~1830)

- ◆18世紀 温泉保養地として復活→富裕層の社交場に
大規模な建築事業
建築家：ジョン・ウッド、ジョン・パーマー、ジョン・エヴェリー、
トーマス・ボールドウィン
ジョージアン様式：人口集中に応じた集合住宅、左右対称の長屋



1754 The Circus

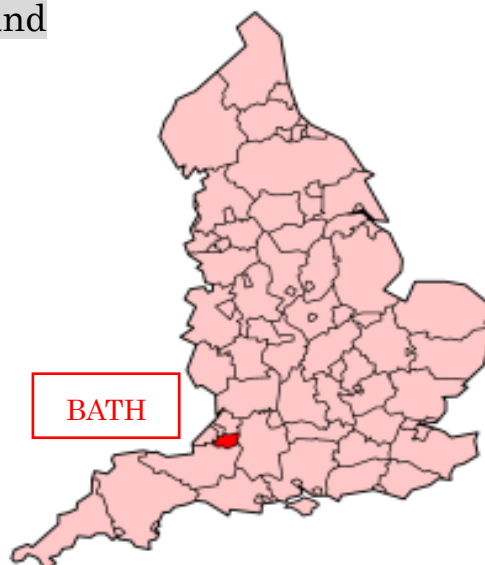


1774 Royal Crescent

The Modern Period

- ◆19世紀 衰退
- ◆1942年 ドイツ空軍による爆撃
- ◆1964年 バース大学創立
- ◆1979年 温泉閉鎖
- ◆1987年 世界遺産登録、改修
- ◆2006年 総合スパ施設サーメ・バース・スパ

The Map of England



University of Bath

Faculties & Departments

- ◆ Engineering & Design
- ◆ Humanities & Social Sciences
- ◆ Management
- ◆ Science

Rankings (2015)

- ◆ 世界大学ランキング (ARWU) 401~500 位
- ◆ イギリス国内 (Times and Sunday Times University Rankings) 10 位
⇒新しい大学、医学部がない

	 横浜市立大学 YOKOHAMA CITY UNIVERSITY	 UNIVERSITY OF BATH
面積	0.1 km ²	0.8 km ²
学生数	4,800 人	13,000 (留学生 2,500) 人
学費	55 万円	£ 4,400 (約 66 万円)
図書館	8 時半~22 時	24 時間利用可能

Transportation of Bath

BUS

- ◆ Bus
 - ・村、町、都市内部を運行するローカルバス
- ◆ Coach
 - ・長距離の急行バス、観光バス
 - ・鉄道よりも安い⇔時間がかかる



TAXI

- ◆ Black Cab
 - ・The Knowledge に合格したドライバー
 - ・予約不要
- ◆ Mini Cab
 - ・個人が経営する合法タクシー
 - ・要予約



OVERGROUND

◆ National Rail

- ・旧 British Rail（イギリス国鉄）
- ・約 28 社の鉄道会社で分割運営されている路線の総称
- ・チケットは 12 週間前から購入可能



Bath Stone

特徴

- ◆ 柔らかく美しいクリーム色
- ◆ “Freestone” と呼ばれ、どの方向にも切断することができ扱いやすい
- ◆ 高い耐久性を持つ→建物の修復の際にも使われる
- ◆ 英国の文化遺産、ナショナルトラスト、王室など英国で広範囲に渡って用いられている
- ◆ Top Bed と Base Bed に分けられ、それぞれ色や性質、用途が異なる

Clean Stonework

- ◆ 石造物の汚れ：都市に多い問題、風化、汚染が原因
- ◆ 石造物を綺麗にすることの目的
 - ・ 外見を改善する
 - ・ 増築や修繕によって元来の建築と新しい建築を調和させる
 - ・ 風化などによる被害を少しでも抑える
 - ・ 建築、彫刻のひび割れや衰えた所の状況を確認する
 - ・ 修繕、保護など他の活動も促進させる



Jane Austen

- ◆イギリスの女性小説家（1775～1817年）
- ◆イングランド南部ハンプシャー・スティーブントン生まれ
- ◆18～19世紀のイングランドの中流社会を舞台にした小説で人気を博する
- ◆作品の多くがバースでの生活が題材になっているとされている
- ◆作品
 - ・ *Pride and Prejudice*
 - ・ *Sense and Sensibility*
 - ・ *Persuasion*
 - ・ *Emma*
 - ・ *Northanger Abbey*
 - ・ *Mansfield Park*



The Jane Austen Centre

- ◆バースでのオースティンの生活を物語る常設展示品やジョージ皇太子によるリージェンシー時代の衣装、書物、地図などを所蔵
- ◆BBC や映画で使用された衣装なども展示
- ◆当時のコスプレをしたスタッフがレクチャー



Industry of Bath

- ◆主要産業は観光
- ◆バース市はロンドンに次いで訪問者の多い観光地
- ◆近年、観光産業に加えてソフトウェア産業、サービス産業、出版産業が伸びてきている

Oxford

History of Oxford

大学都市になるまで

- ◆730年 サクソン人の王女フライズワイドが修道院建設（現クライスト・チャーチ）
- ◆912年 北のデーン人から村を守るため国境砦建設→出入りの激しい商業・産業地に
- ◆1096年 大学で講義が行われる
- ◆1191年 産業発展、イギリスで6番目に大きな町に

大学の発展

- ◆1100年 大学の参事会会員たちの博識さが知られ、講義を行なうようになる
- ◆1167年 パリ大学を除籍された学生が移住→組織の必要性が増し正式に大学創立
- ◆1200年 大学組織誕生
- ◆1249年 オックスフォード最古のユニバーシティ・カレッジ設立
 - ・当時の制度：16歳で入学、7年間修学
 - ・文法・論理学・修辞学の三学、数学・幾何学、天文学、音楽、哲学の4つの分野
 - ・神学・医学は上級コース
 - ・ほとんどの学生は聖職者となることを目的にしていた
- ◆1598年 ボドリアン・ライブラリー建設

市の発展

- ◆20世紀初頭：産業の成長、人口増加
- ◆印刷、出版産業確立
- ◆ウィリアム・モリス：「モリス自動車会社」設立
 - 1970年代までに2万人以上が雇用
- ◆市は2つの都市部から構成：モードリン橋西の大学都市と東の自動車都市
- ◆コスモポリタンの性格（自動車工場への移民労働者の流入、近年における東南アジアからの移民、膨大な学生人口）

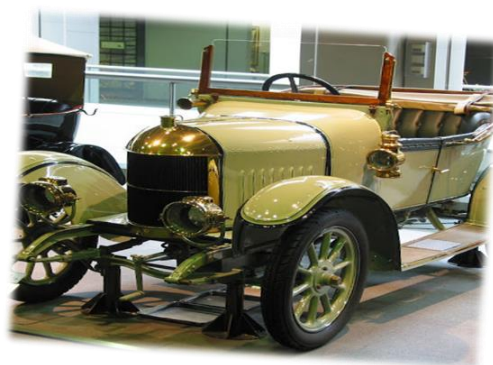
The Map of England



Automotive Industry

オックスフォード工場

- ◆1913年ウィリアム・モリスが創業“Morris Motors Company”
- ◆工場初の自動車はモリス「ブルノーズ」オックスフォード
- ◆当時の1週間の生産台数はわずか20台
- ◆歴代生産車両14ブランド、1,165万台以上
- ◆自動車以外にも多くの製品を製造
- ◆1994年BMWグループが買収
- ◆現在はMINI製造の中心拠点
(1日あたり最大1,000台、80%が輸出)



BMW

- ◆ドイツのバイエルン州ミュンヘンを拠点とする自動車
および自動二輪車、エンジンメーカー
- ◆傘下にロールス・ロイスとMINIのカーブランド
- ◆子会社にBMW Motorrad



MINI

- ◆1959年に設立された自動車ブランド
- ◆クラシック MINI とニューMINI
- ◆生産台数 250 万台
- ◆110 カ国で販売



Oxford University

Christ Church

- ◆オックスフォード大学のカレッジ兼オックスフォード教区の大聖堂
- ◆キリストの寺院又は家、“The House”としても知られる
- ◆オックスフォード大学の中で最も大きく、多くの人が訪れる
- ◆1525年ウルジー枢機卿によって Cardinal College として設立された
- ◆1546年ヘンリ 8 世によって Christ Church として再創設された
- ◆世界で 3 番目に古いカレッジ
- ◆College Life
 - ・生徒数：大学生 430 人、大学院生 220 人
 - ・寮：歴史的建造物→近代化され、ゆったりとした快適な宿になっている
 - ・部屋：1 年生はそれぞれ割り当てられ、2 年生からくじ引きで決める



Merton College

- ◆1264 年創立
- ◆創立者：ウォルター・ド・マートン
- ◆現在学生 300 人、大学院生 350 人が所属
- ◆最古の常設カレッジ



Mob Quad

- ◆オックスフォードで一番古い中庭
- ◆1288～1378 年の長い期間で建設
- ◆“Mob Quad” という名前はカレッジに住む生徒が呼んでいたという 1797 年の記録から
- ◆西側は 1373～78 年にカレッジの図書館として建設、これがヨーロッパ最古の学術図書館になる



Carfax Tower

- ◆街の中心部にあり、ランドマークタワーとされている時計台
- ◆1032 年に建設
- ◆旧セント・マーティン教会の一部
- ◆15 分に 1 回鐘が鳴る
- ◆からくり時計で有名



Blenheim Palace

- ◆イギリスバロック建築を代表する宮殿
- ◆1704年スペイン継承戦争で将軍ジョン・チャーチルが宿敵フランス軍を破った功績を讃えてアン王女から贈呈された
- ◆戦場となったブレンハイム（英語名ブレナム）より名前がつく
- ◆1722年完成（建築家ジョン・ヴァンブラ設計）
- ◆後にチャーチル家の居城となる
- ◆1987年文化遺産登録



Gardens

- ◆宮殿完成時：ロマン主義的なイギリス式庭園
by ヘンリー・ワイズ
- ◆18世紀頃：風景式庭園
by ケイパビリティ・ブラウン
- ◆1925～1932年：ル・ノートル様式フランス庭園
by アシル・デュシェーヌ



London

Townhouse in London

- ◆ 貴族・ジェントリが所有する所領のカントリーハウスに対するロンドンでの住居を指す
- ◆ 社交期間、大きな舞踏会のあるときタウンハウスへ移った
- ◆ ほとんどはテラスハウス
- ◆ 第一次世界大戦後破壊、ホテルに

Apsley House

- ◆ 1778 年建設、1820 年改築
- ◆ 当時のまま残っているほぼ唯一のタウンハウス
- ◆ ウェリントン公爵：ワーテルローの戦いの英雄
- ◆ Wellington Museum：公爵に関する展示
- ◆ 王室から送られた絵画、磁器など 3,000 点



Buckingham House (Palace)

- ◆ エリザベス女王の公邸、執務の場
- ◆ 1703 年 バッキンガム公爵の私邸
- ◆ 1761 年 英国王室所有→19 世紀改築



Somerset House

- ◆ 16 世紀 サマセット公爵が宮殿建設
- ◆ 1558 年 エリザベス 1 世の所有、王妃の宮殿
- ◆ 1775 年～ 取り壊し→建て直し
- ◆ コートールド美術館、文化施設がある



Kensington Palace

- ◆17世紀 ノッティンガム伯爵のために建設
- ◆1689年 英国王室が買い上げ
クリストファー・レンが改築
- ◆18世紀 ジョージ1世が改築、現在の建物に



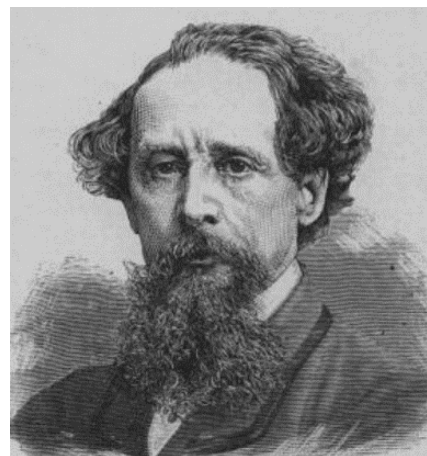
Clarence House

- ◆1825～1827年 ウィリアム4世のため建築
- ◆ジョン・ナッシュのデザイン、古典的で質素
- ◆プリンスオブウェールズの公邸
- ◆第二次世界大戦の歴史を感じさせる展示



Charles Dickens

- ◆ヴィクトリア朝を代表するイギリスの小説家（1812～1870年）
- ◆主に下層階級を主人公とし弱者の視点で社会を諷刺した作品を発表した
- ◆主要作品
 - ・ *The Pickwick Papers*
 - ・ *Oliver Twist*
 - ・ *The Old Curiosity Shop*
 - ・ *A Christmas Carol*
 - ・ *David Copperfield*
 - ・ *A Tale of Two Cities*
 - ・ *Great Expectations*



Charles Dickens Museum

- ◆ チャールズ・ディケンズが 1837 年から 3 年間住んだ家をそのまま博物館にしたもの
- ◆ 実際にディケンズの愛用品や日用品が置かれ、当時の生活が垣間見える
- ◆ *Oliver Twist* を執筆したときに使われていた書斎も見学することができる



Charles Dickens Coffee House

- ◆ 1859～1870 年までチャールズ・ディケンズの住居兼オフィスであったところ
- ◆ *All the Year Round* という雑誌を刊行する出版社としても使われていた

Musical

West End

- ◆ セントラル・ロンドン内に位置する一区域、
またはその地域にある劇場群のこと
- ◆ 劇場数：44

◆ *The Phantom of the Opera*

- ・ ガストン・ルルー原作
- ・ 1986 年～
- ・ Her Majesty's Theatre で上演



◆ *Les Misérables*

- ・ ヴィクトル・ユゴー原作
- ・ 1985 年～ (1 番のロングラン)
- ・ Queen's Theatre で上演



Royal Opera House

- ◆ 三大舞台芸術劇場
- ◆ ロイヤル・オペラとロイヤル・バレエ団
- ◆ バック・ステージ・ツアー
- ◆ 主な上演作品
 - ・ *Swan Lake*
 - ・ *The Nutcracker*
 - ・ *The Sleeping Beauty*



Shakespeare's Globe

- ◆ 1599 年開業、1997 年改築
- ◆ 劇場見学ツアー
- ◆ 主な上演作品
 - ・ *Macbeth*
 - ・ *Hamlet*
 - ・ *A Midsummer Nights Dream*



まとめ

数回に渡る事前調査でバース、オックスフォード、ロンドンについての歴史や文化や産業など、それぞれの街を形成する諸要素を各ゼミ生で手分けして調べることによって、多面的で効率的な学習が出来た。オックスフォードは主に大学や建造物、ロンドンには娯楽施設や飲食店、ゆかりのある有名人に焦点を当て、調べた。前者の2つの都市と比べ、バースは知名度もそれほど高くなく、また、フィールドワーク中最も長く滞在することも考慮して、「バース」という地名の由来から始まり多岐に渡る分野を学習した。オックスフォードには世界有数の長い歴史を持つオックスフォード大学がある。沢山のカレッジとその広大な面積、また、カレッジと街が調和している風景をみるにオックスフォードは大学都市としての特徴が強い。屈指の世界都市であるロンドンには著名な作家と関わりが深い建物や、宮殿やタウンハウスのような長い歴史を持つ建築物、また、ウエストエンドのような数多くの劇場がある地域があり、文化的な多様性を感じる都市である。バースは温泉が有名であり、イングランド有数の観光地である。温泉の歴史は古く、ローマ支配時代から続いており現在では市内中心部に温泉を利用した総合スパ施設が建設されている。街並みは石灰岩を使用した多くの美しい建物群が立ち並ぶ。以上に挙げた3つの都市はそれぞれに異なる歴史と文化があり、イギリスの多様性を感じた。

2. Summer 2016 University of Bath English Language and Culture Course



1 授業形式

初日の流れ

クラス分け学力テスト

Reading (マーク形式)

Writing (テーマ指定の小論文)

Speaking (教員1名と生徒2名の対話形式)

↓

キャンパスツアー

バース大学在学生のボランティアによる大学構内散策

↓

クラス分け

各クラスで授業

通常授業

90分×2コマ+特別講義 or 課外授業 (月～金)

2 授業内容

《topic 例》

① News and Current Affairs

近年流行しているポケモン GO に関する異なる新聞記事を各グループで読み、他のグループに向けて内容の要約を発表。どれもポケモン GO の利用が引き起こした事件や事故ばかりであり、技術の発達をもたらす影響について考えさせられた。

② Culture

イギリスの文化について Food、Geography、Art、History、Institution など各項目で思い付くものを各グループで挙げる。全体で意見交換と教員による補足説明。例えば、イギリスの Food に関してみな Fish & Chips を挙げたが、実際にイギリス人はそれほど食べないことが分かり、実際のイギリス文化と外国人から見たイギリス文化の間にはギャップがあることに気付いた。

3 課外講義

Roman Bath Wednesday, 3rd

紀元前 1 世紀頃に造られたローマ式大浴場跡で、19 世紀末に復元された。現在は入浴することは出来ないが、博物館としてバースの歴史を知ることが出来る場所になっている。今もお湯が湧き出ているところを見ることが出来る。外国人向けの音声ガイドが用意されており、各スポットで解説を聞ける形になっている。



Stourhead Wednesday, 10th

世界で最も美しい風景式庭園の一つで「パラダイス」と称されることもあるほどである。この庭をデザインしたのは銀行家のヘンリー・ホワー2世で、1946年にナショナルトラストに寄与された。当時は左右対称の幾何学模様で代表されるようなフランス式庭園が流行だったが、イギリスの地勢に合わなかったため、より自然に近い風景式庭園へと流れが変わっていった。広大な土地には、湖や神殿、石橋などが美しく配置されている。



4 プロジェクト

クラスでの授業とは別に Reading/Music/News/Bath Culture/Food1/Food2 の6クラスに分かれて授業やワークを行う。

Reading (市橋/小林/中村)

初回の授業で題材にする文学作品を選択する。クラス全体の多数決で『分別と多感』に決定（他には『1984』『フランケンシュタイン』など）。ワード・パラグラフ・要約・異文化発見・(自分と登場人物との) コネクション発見・話し合いでのリーダーを分担し毎回予習。授業内でそれぞれの担当箇所を発表・ディスカッション。

Food1 (友永/西迫)

初回の授業ではイギリスの食べ物（伝統菓子やチーズ、果物など）を実際に試食し、それぞれの見た目や味などを英語で表現した。また別の授業ではイギリスの有名な料理家のビデオを鑑賞し、調理において使用する語句や伝統料理について学んだ。映像の撮り方によって受ける印象の違いなどについても話し合った。最終的にグループで一つイギリスの伝統料理を選び、動画を制作。最後の授業にて Food1・2 合同で発表。



5 異文化交流

プログラムが始まる前夜に寮近くのパブで **Welcome Party** があり、お世話をしてくれる在学学生スタッフやプログラムの参加者と初めて顔合わせをした。参加者は中国人と日本人がほとんどで、それ以外の地域から参加している生徒は少なかった。初対面かつ英語で話さないといけない緊張状態であったこともあり自分たちで固まってしまうがちだったが、他国からの参加者はフレンドリーな雰囲気話しかけてくれた。また学生スタッフが進んで会話を盛り上げてくれた。授業が始まってからは、放課後に在学学生スタッフが主体となって行っている **Activity** があり、他の学生とコンサートを聴きに行ったり、スポーツをしたりする機会が設けられていた。**FW** 研究の為ナショナルトラストの施設を訪れる時に、興味を持った中国人学生と一緒にいったこともあった。最終日には **Farewell Party** が行われた。初日の **Welcome Party** のような緊張した場ではなく、楽しい雰囲気なか会話を楽しんだり、写真を撮って別れを惜しんだりした。毎日の授業や寮生活を通して、文化の違いに困惑する場面も多くあった。例えば、寮で同フロアの中国人生徒がトイレやお風呂を正しく使ってくれずに不快な思いをしたり、洗濯ひとつとってみても機械の使い方が分からなかったり、日本ではない国で、文化や言葉の違う人と生活していくことの難しさを身をもって感じた。自分たちが普段当たり前だと思っている概念を取り払って相手の価値観を知ろうとすることや受け入れられない時はとことん話し合うことが海外の交流において必要だと学んだ。また、この 2 週間は自分たちの語学力の不足を痛感した時間でもあった。授業中、間違いを恐れず自分の考えを言葉にする他の国の学生を見て、積極的に発信しようとする力もまた必要であると感じた。今回の短期留学で学んだ部分を、これからの語学の勉強や、海外の人との交流に生かしていきたい。

3. Field Work Presentations

I. 140057 市橋若菜



事前研究、FW でのインタビューを基に National Trust でのボランティアに焦点をおき調査した。

目次

- 研究目的
- National Trustとは
- 事前研究
- 現地調査：インタビュー内容
- インタビュー結果
- 事後研究①
- 事後研究②
- まとめ 考察

National Trust とは

- 正式名称：The National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty (歴史的名勝および自然的景勝地のためのナショナル・トラスト)
- 国民のために、国民自身の手で価値ある美しい自然と歴史的建造物を寄付、遺贈、買取りなどで入手し、保護管理し、公開することを目的とした民間のチャリティー組織
→実感をともなう市民参加の方法を取り入れている

National Trust 概要

National Trust：国民のために、国民自身の手で建造物等を保護、管理することを目的としたチャリティー組織。1895年創設。

事前研究：ナショナルトラストでのボランティア

In House（フロアガイド、受付、解説補助）やFamily Volunteering（家族のためのボランティア）などボランティアの種類が充実している。



研究目的

「実感をともなう市民参加の方法」をどのように実現させているのか←ボランティアに焦点を絞って調査

事前研究：ボランティアの種類が充実。参加者のニーズに合わせて様々な体験をすることができる、ということがわかった。

→研究目的：National Trust では実感を伴う市民参加の方法をどのように実現させているのか？

- Bath Assembly Rooms
- Stourhead
- Prior Park Landscape Garden
- Lacock Abey & Village
- Osterly Park & House
- Red House

} インタビューを実施



今回訪れた 6 箇所の保護地のうち、**Prior Park、Lacock Abey、Osterly Park and House** の三箇所でインタビューを行った。

インタビュー内容

1. ナショナルトラストのボランティアをするにあたり必要なスキルはあるか
2. なぜナショナルトラストでボランティアをしようと思ったのか

インタビュー内容

1. **National Trust** でのボランティアに必要なスキルはあるか
2. なぜ **National Trust** でボランティアをしようと思ったか

インタビュー結果

1. ナショナルトラストのボランティアをするために必要なスキル：“speaking, listening, friendly” 等どれも基本的
2. なぜナショナルトラストでボランティアをしようと思ったのか：
 - 「退職して何かしたいと思いボランティアに参加した」
 - 「夫が退職後にボランティアをしていたので自分もしてみようと思った」
 - 年配の方、退職者がほとんど

インタビュー結果

1. **Speaking** など基本的な技術
 - 技術より意欲の方が大切
2. 「退職後に何かしたかった」という意見が多かった
 - インタビューをしたほとんどが年配の方であった

事後研究①：ボランティアの重要性

- ボランティアと有給スタッフとの関係

例) カントリー・ハウス：ボランティア300人前後、有給スタッフ5～10人未満
 給料の有無以外では対等な関係にある
 →ボランティアがいないと成り立たない構造

事後研究①

ボランティアと有給スタッフとの関係
 ボランティア：300人前後
 ⇔有給スタッフ：5～10人未満
 給料の有無以外では対等な関係である。
 →ボランティアがいなければ成り立たない構造になっている。

事後研究②：退職後のボランティア

退職後のボランティア

- 交友関係を広げることができる、地域社会とのつながり
- 社会貢献をするという達成感、満足感を得ることができる
- 好きなことに対する学習意欲につながる

高齢者にやさしいボランティアシステム

- 短時間シフト制
- 館内ガイド←ほかのボランティアより体力を使わない

まとめ 考察

- ナショナル・トラストにとってボランティアは必要不可欠な存在。特に時間を自由に使うことのできる年配ボランティアの存在は大きい
- 人と話し、歴史を知り、美しい風景を多く眺めることのできるナショナルトラストでのボランティアは退職者にとっても、第二の人生を送るのに適している
- Family Volunteeringなどニーズに合わせた幅広い活動、無理のないボランティアシステムを形成している



ボランティア主体の保護活動につながり、
実感をともなう市民参加の方法を実現させている

参考文献

- Home | National Trust (閲覧日：12月5日)
<https://www.nationaltrust.org.uk/>
- Volunteer | National Trust (閲覧日：12月5日)
<https://www.nationaltrust.org.uk/volunteer>
- 小野まり『英国ナショナル・トラスト』（2016年）河出書房新社（p9～15）

事後研究②

退職後のボランティア：交友関係を広げる等多くのメリットがある。

→National Trust では短時間シフト制、体力をあまり使わない労働にするなど高齢者が活動しやすいボランティア政策を行っていることが分かった。

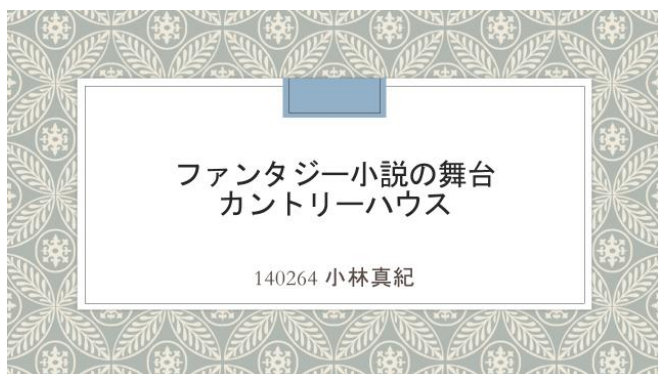
まとめ

・National Trust にとってボランティアは不可欠な存在であり、特に時間を自由に使うことのできる年配ボランティアの存在は大きい

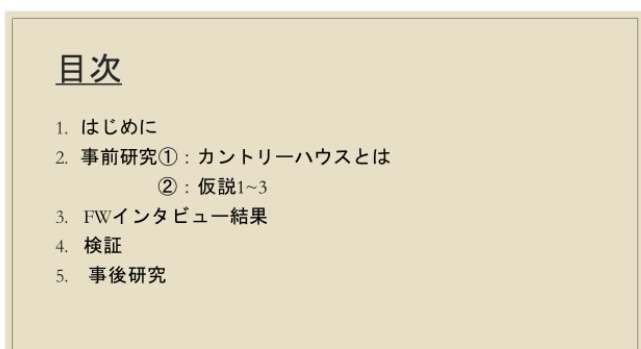
・National Trust でのボランティアは退職者にとっても、第二の人生を送るのに適している

・National Trust はニーズに合わせた幅広い活動、無理のないボランティアシステムを確立させている

よって、ボランティア主体の保護活動につながり、実感をともなう市民参加の方法を実現させているのではないかと、いう結論に至った。



ファンタジー小説の舞台として描かれることの多いカントリーハウスについて調査を行った。



目次はこの通りである。



1950年代イギリスのファンタジー作品にはカントリーハウスが舞台のものや、カントリーハウスが異世界の入り口となっているものが多かったので疑問に思い、その理由を考察した。



まずカントリーハウスとは田舎にある広大な庭を伴う貴族の邸宅である。第一次世界大戦前までに建設された。大戦後は破壊され衰退し、現存するカントリーハウスはナショナルトラストの管理下にある。

➤ 仮説

1. 過去にかかわる作品が多い

- 『グリーン・ノウの子どもたち』 …過去の人間との出会い
- 『トムは真夜中の庭で』

⇒古く歴史あるカントリーハウスが舞台に

まず仮説の1つ目として過去に関わる作品が多いことから、古く歴史のあるカントリーハウスが舞台になっていると考えられる。

2. 作品の成立した時代背景

- 科学の発達・アメリカ文化流入・大英帝国の終焉
=生活の変化、自然破壊、伝統の喪失という問題
- 変化の中で過去を理想化・・・現実では衰退しつつあるカントリーハウスを理想的な場所として描いている
- ※作品中でもカントリーハウスの危機が描かれている

⇒カントリーハウス・・・喪失の危機にあった「イギリスの伝統」のメタファー

2つ目の仮説として時代背景に注目し、当時伝統の危機に瀕していたイギリスでは過去への憧れがあり、過去のものとなりつつあるカントリーハウスが舞台となったのではないかと考えた。また、理想的に描かれるカントリーハウスはイギリスの伝統そのものを暗示しているのではないかと。

3. カントリーハウスとファンタジー

- 時代が進むにつれファンタジーの舞台は日常から遠くなる（森⇒国外⇒別世界）←科学の発展、森の開発、都市化、機械化
- カントリーハウス=非日常的空間、過去の想像
- ⇒ファンタジー作品の舞台になり得る



3つ目の仮説としてカントリーハウスという場所にファンタジーと結びつくイメージがあるのではないかと考えた。都市から離れ、現在人の住んでない非日常的な場所として物語の舞台になっていると考えられる。

➤ 疑問

- ① 実際にカントリーハウスは「イギリス」の伝統の象徴とされるのか
← 支配階級の住居
- ② カントリーハウスにどんなイメージをもつか
← ファンタジーのイメージと結びつくのか

事前研究でこの3つの仮説をたてたが、本当にカントリーハウスがイギリスの伝統の象徴とされているのか、そしてカントリーハウスは実際にどんなイメージをもたれているのか疑問に思った。

FW

- カントリーハウスでインタビュー
 - ① カントリーハウスに魅力を感じるか
 - ② 理由
 - ③ カントリーハウスに対するイメージ
 - ④ カントリーハウスはイギリスの伝統だと感じるか
- ※他ファンタジー映画のロケ地となった建物で「古い場所」についてインタビュー

調査結果

- カントリーハウスの魅力
戦前の生活への憧れ、歴史・古いものへの興味、当時の想像
- イメージ
庭、田園風景、歴史、伝統、ファンタジー、壮大、遺跡
- イギリスの伝統の象徴だと感じるか
見方によって伝統とみなすかは分かれる
- ファンタジーとのつながり
古い場所、建物では過去の暮らしを想像できる、昔の人とのつながりを感じるためファンタジー作品に利用される

検証

仮説1：過去を扱ったファンタジー作品が多いので歴史の古いカントリーハウスが舞台に
仮説3：カントリーハウスは非日常空間、過去を想像させるから

- 過去・想像力との結びつき
歴史と深く結びつき当時の生活・人を想像させる場所
→過去を扱ったファンタジーにうってつけの舞台

仮説2：イギリスの伝統の喪失、生活の変化という時代に描かれたため過去を理想化しイギリスの伝統を象徴する場所として多くの作品で描かれた

- 今とは大きく違う過去の生活への憧れは存在する
- 異論もあるが伝統の象徴と見なすことは可能

この疑問を解消するためにイギリスのカントリーハウスで①カントリーハウスに魅力を感じるか②その理由③カントリーハウスのイメージ④カントリーハウスはイギリスの伝統だと感じるかという項目でインタビューを行った。

調査結果はこの通りである。全員がカントリーハウスを魅力的だと答え、戦前への憧れや古いものへの興味を示した。カントリーハウスが伝統の象徴であるかは意見が分かれたが、古い建物は昔の人とのつながりを感じられるファンタジーとつながる場所であるという意見が挙げられた。

調査結果を踏まえた考察として、カントリーハウスと過去・ファンタジーとはイメージとして深く結びつくことが分かった。過去を扱ったファンタジーではうってつけの舞台と言える。

次に伝統の象徴として舞台となったのではないかという仮説については、全員ではないが過去への志向からカントリーハウスを魅力的に思う人やカントリーハウスを伝統の象徴と見なす人がいたので、カントリーハウスを伝統の象徴として描いているという見方は可能である。

事後研究

1. 戦後のイギリス社会

- 戦争の爪痕、経済的不振、国際影響力の低下
- 1950年代：国内的に回復の兆し…社会福祉、前例のない好景気
⇒経済的余裕、生活のゆとり

2. カントリーハウスのイメージ形成

- イギリスの歴史や文化など「イギリスらしさ」を守ることを目的とするナショナルトラストが1930年からカントリーハウスの保全に力を入れたことで支配階級の遺産が国民文化・国民的遺産へと読み替えられた

⇒貴族の手放した田園やカントリーハウスの訪問が流行。1980年代にはヘリテージツーリズムが成長産業に

- この頃からカントリーハウスが徐々にイギリスの伝統と見なされていき、小説にもそれが反映されている



<https://www.nationaltrust.org.uk/prior-park-landscape-garden>

参考文献

- 安藤聡『ファンタジーと歴史的危機—英国児童文学の黄金時代—』、彩流社、2003年
伊東好次郎「イギリス人とイギリスの庭園(II): イギリスカントリーハウスの歴史的背景」、『川村学園女子大学研究紀要』13(1)、p.33-61、2002年
杉恵 博宏「イギリスのカントリー・ハウス(貴族の城館)小論」、『明治大学人文科学研究所紀要』(35)、p.183-197、1994年
安藤 聡「現代英国ファンタジーとその背景」、『大妻比較文化: 大妻女子大学比較文化学部紀要』(12)、p.138-119、2011年
水野祥子「ナショナル・トラストにみる「イギリスらしさ」」、指昭博編『はじめて学ぶイギリスの歴史と文化』、ミネルヴァ書房、2012年
ロバート・クロス「若者文化と戦後イギリス社会」田口哲也訳、小野修編『現代イギリスの基礎知識—英国は変わった』、明石書房、1999年

さらに仮説の検証をするため、事後研究として物語が生まれた戦後のイギリス社会、そして当時のカントリーハウスの状況について調べた。戦後イギリスは経済的にも衰退していたが 50年代には回復し始め前例のない好景気から生活にゆとりが生まれた。

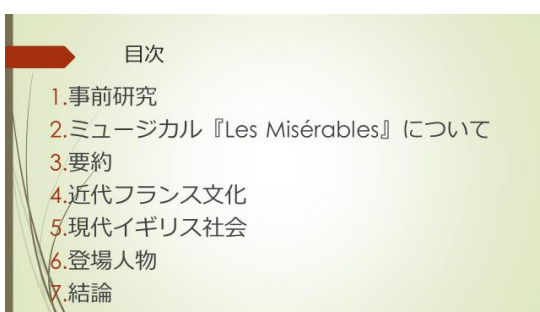
カントリーハウスの状況としては、「イギリスらしさ」を守ることを目的とするナショナルトラストがカントリーハウスの保全に力を入れたことから、カントリーハウスが国民文化と読み替えられ、カントリーハウスの訪問が流行。この頃からカントリーハウスはイギリスの伝統と見なされ初め、小説にもそれが反映されている。

参考文献は以下の通りである。

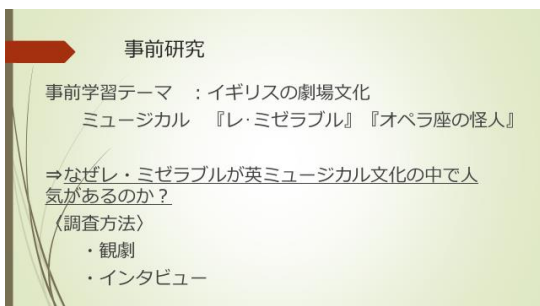
III. 140454 友永純菜



ミュージカル版レ・ミゼラブルと現代イギリス社会の関係について調べた。



今回の調査は以下に基づく。



事前学習は英国劇場文化についてである。ミュージカルは、英国人にとって人生を豊かにする大衆の娯楽文化である。ロンドンのウェストエンドにおいて人気のある2作品はどちらもフランス文学を基にしていることに着目し、特になぜレ・ミゼラブルが最も長いロングラン公演を行っているのか明らかにしていく。



ミュージカル版は、1862年のヴィクトル・ユゴー作の小説を原作としている。1985年に初演されてから、現在も続いている。製作者は英キャメロン・マッキントッシュ、作曲はユダヤ系仏のクロード=ミッシェル・シェーンベルク、作詞は同じくアラン・ブーブリルである。

1815年、パン1つの窃盗罪により19年間投獄されていたジャン・バルジャンは、仮出所が認められ、1人の司教に出会い、変わる決意をする。


1823年、バルジャンはモントルイユ・シュール・メールで市長になっていた。その地に赴任したジャベールは、バルジャンの存在を疑い、偽の彼が裁判で裁かれてしまうことを伝える。それを知ったバルジャンは、彼の無実を晴らし、ファンテーヌの子コゼットを、テナルディ夫妻の元から救済する決意をする。

1832年、バルジャンとコゼットはパリで暮らしていた。革命軍に参加するマリウスがコゼットに一目惚れするが、ジャベールの存在を恐れるバルジャンは逃亡することに決める。民衆の裏切りにあい、革命軍は全滅を迎えるが、バルジャンは革命軍からマリウスを救いだす。敵の捕虜になっていたジャベールを逃がし、そのままと困惑したジャベールは自殺を図る。その後、バルジャンはマリウスとコゼットの結婚を認め、姿を消す。テナルディ夫妻から真実を聞いたマリウスは、コゼットを連れてバルジャンの最後に立ち会う。

ミュージカルの要約は左記となっている。

近代フランス社会

1789年 フランス革命 ⇒ 資本主義、民主主義の発展	■舞台：1815～1832年 = 第二帝政期
1804年 第一帝政	■19世紀フランス社会 個人主義に基づく国民国家成立
1814年 第一次王政	■ロマン主義 主題：民衆
1815年 第二次王政	⇒自らのアイデンティティを問う
1848年 第二共和政	
1852年 第二帝政	
1870年 第三共和政	



画像引用元：http://blogs.yahoo.co.jp/kmclub300/12637073.html

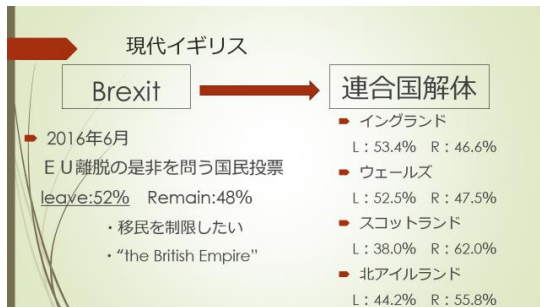
ミュージカルの舞台である 1815 年から 1832 年は、小説が書かれた 1852 年の社会を表している。19 世紀のフランス社会は、2 度の王政、帝政、共和制の乱立の中、経済発展の緩慢さによる社会階層が細分化していた時代であった。この中で、個人主義に基づく国民国家が成立していた。原作はロマン主義小説に分類され、テーマは民衆が自らのアイデンティティを問うことである。

ミュージカル (テーマ)

■テーマ：Who Am I?

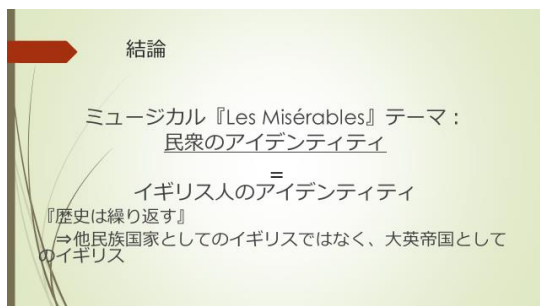
作者がユダヤ系フランス人
⇒第二次世界大戦中に生まれた彼らは少なからず政治的影響を受け成長

ミュージカルのテーマも、同名の曲が存在していることから「自分が何者か？(Who am I?)」というアイデンティティの模索であることがわかる。作曲者と作詞者は、ともにインタビューで、自らの生い立ちがユダヤ系であるということから、第二次世界大戦中の政治的影響を受け、自分がどこの国のアイデンティティであるかということを模索しており、このテーマを設定したと語っている。



このテーマは現代イギリス社会にも見られる。まず1つ目の課題として、Brexit、EUからの離脱があげられる。2016年6月、離脱を問う国民投票が行われ、3,000万人の投票者のうち、52%が賛成で、48%が反対という結果になった。インタビューを行った中で、賛成者の主な理由として移民を制限したい、大英帝国としての地位を取り戻したいなどという声が多かった。

もう1つの課題は、連合国解体問題である。ウェールズとイングランドは離脱に賛成し、スコットランドと北アイルランドは反対する傾向が見られた。1801年にイギリス連合国となったが、4国はそれぞれ独自の議会をもっており、実際に独立の是非を問う国民投票が行われたことも記憶に新しい。



以上より、ミュージカル「レ・ミゼラブル」がイギリスでロングラン公演を続けている理由は、テーマである「民衆のアイデンティティの模索」が現代イギリス人のアイデンティティ模索と一致しているからではないかと結論付ける。「イギリス人」としての民族意識、さらに、4国の民族意識などのアイデンティティはイギリス人にとっての現代問題となっている。



参考文献は以上のとおりである。

OLIVER TWISTに関する研究

140478 中村さくら

Charles Dickens 著 *Oliver Twist* に関し、作者、作品について調査、考察をした。

CHARLES DICKENS

Charles Dickens (1812-1870)

ヴィクトリア朝時代を代表するイギリスの小説家である。主に下層階級を主人公とし弱者の視点で社会を諷刺した作品を発表した。

主な作品

- 「オリバー・ツイスト」
- 「クリスマスキャロル」
- 「二都物語」
- 「大いなる遺産」等



Dickens についてである。

OLIVER TWIST

1838年に出版された長編小説



概要

孤児であるオリバーは救貧院で生まれ養育院で育てられ9歳の誕生日に再び救貧院へ戻る。そこは子供たちが満足して暮らせるところではなかった。厳しい環境下に耐えられず遥か彼方のロンドンを目指す、、、ロンドンで出会ったスリ少年のドーキングズ、スリ少年たちを束ねるユダヤ人のフェイギン、慈悲深い紳士ブラウンロー氏など様々な出会いがオリバーの生活を変える。

Dickens の作品の中で今回選んだのが *Oliver Twist* である。そして *Oliver Twist* のあらすじはこの通りである。

事前研究について

Charles Dickensの生い立ちについて
救貧院制度について

↓

研究のテーマ

- ・孤児、救貧院制度を取り上げた理由、伝えたいこと、影響
- ・最下層である主人公のオリバーが最終的に結末をハッピーエンドで迎える意義

イギリスに行く前に研究したものはこの2点について。これからイギリスでの研究テーマを決めた。

- ①孤児、救貧院制度を取り上げた理由、伝えたいこと、影響
- ②最下層である主人公のオリバーが最終的に結末をハッピーエンドで迎える意義

フィールドワークについて

研究方法

- インタビュー
- Dickens Museum訪問
- ロンドン街歩き

フィールドワークを行うにあたってこの3つの方法で行った。ロンドン街歩きはDickens Museum付近を実際に歩いてみてDickensがどのような街並みや社会問題を感じたのかを考えることを目標とした。

DICKENS MUSEUM

チャールズ・ディケンズが1837年から3年間住んだ家をそのまま博物館にしたもの

Oliver Twistを執筆したときに住んでいた家でもある



Dickensが住んでいた家をそのままMuseumにしたのがDickens Museumである。ロンドンの宿泊先から10分程度のところにあり、インタビューのほとんどもここでいった。

DICKENS MUSEUM



Museumの中はこのようになっている。客間は豪華でありながらも生活スペースは質素なものや生活感が溢れているものが置いてある。またこのようなものを見ながら各フロアにいるボランティアの方々から話を伺うことができた。

インタビューについて

質問内容

- ①なぜディケンズは孤児や救貧院を取り扱ったのか
- ②「オリバーツイスト」を通して一番伝えたかったことはなにか
- ③「オリバーツイスト」においてハッピーエンドでむかえる意義とはなにか
- ④ディケンズが社会に与えた影響とは何か

調査のメインとなるインタビューについてである。質問内容はこの通りである。

インタビューについて①

結果

- ①当時のロンドンやイギリスの状態を知ってもらうため
問題を一般化するため
- ②貧困状態、孤児、救貧院について知ってもらい改善の
ために援助してもらうため
どんな階級でもhardshipを乗り越えなければいけないこと

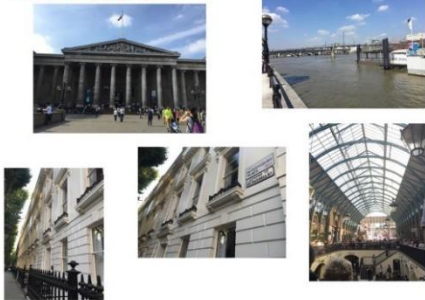
インタビューの結果をまとめるとこのようになった。左にふってある番号は質問内容にふってある番号と対応している。

インタビューについて②

結果

- ③下層階級への助けを求めること、ロンドンの状態を伝えること
- ④希望を含め、状況はいつか変わるということを伝えるため

ロンドン街歩き



フィールドワークの3つ目として行ったのがロンドンの街を歩いてみることである。Dickens Museumの近くには多くの有名な建物やきらびやかな建物があった。

考察

ディケンズの*Oliver Twist*に対する考え方

→下層階級にスポットを当て、ヴィクトリア朝時代の生活を変える(問題の一般化)、援助を促進させる効果

ディケンズ作品のハッピーエンドについて

- 雑誌に投稿する形で読まれていたため読者の期待を高めて次回につなげるため(ビジネス面)
- すべての階級に希望を与える(ストーリー面)

街歩きを通して

→博物館の周りは華やかに思えたがそれでも下層階級の人々も見受けられ、また綺麗とは言い難いような場所も見受けられた

このようなフィールドワークを通して考えたことはこの通りである。

結論

孤児、救貧院を取り上げた理由、伝えたいこと、影響

- 当時のロンドンの状況を伝えるため
- 上層階級に対しては下層階級の生活への援助をしてほしいということ、下層階級に対しては生活を改善することが出来るという希望は存在しうる
- 貧困に対する理解が深まり生活の向上が見られた

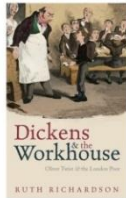
主人公オリバーがハッピーエンドを迎える意義

- 下層階級に希望を与える
- 一生懸命行うことの大切さを伝える

それに応じて出した結論がこれである。
Dickens が孤児を取り上げた理由や伝えたいことは、当時の悲惨な状況を伝えることに専念し、また様々な方面の人々に Dickens からメッセージを送っていたのだと結論づけた。

今後の研究について

Dickens & the Workhouse (2012) Rush Richardson

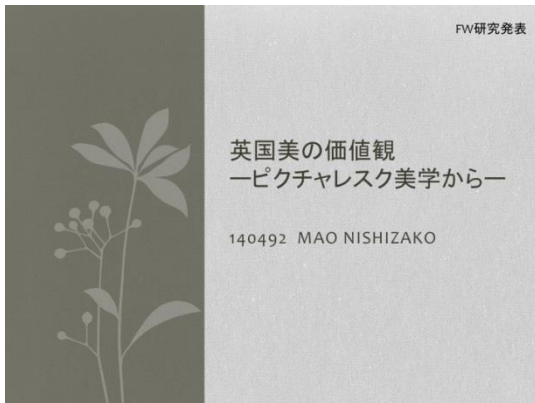


モデルとなった救貧院や人物がいることが明らかとなった

フィールドワーク中、Dickens の救貧院についての本を得ることができたのでこの本を通して今後は事実確認や Dickens の考えに寄り添えるよう研究していきたいと考える。

参考文献

Rush Richardson
Dickens & the Workhouse 2012, Oxford University Press



英国の美の価値観をテーマに FW 研究を行った。

事前学習

丹治愛『ジェイン・オースティンの風景論序説—ピクチャレスクからイングランド的風景へ—』を読んで。。。。

- * 若い頃のジェイン・オースティンがギルピンのピクチャレスク論に夢中
- * 『分別と多感』『高慢と偏見』『ノーサンガー・アビー』 oピクチャレスク 『マンズフィールド・パーク』『エマ』『説得』 -ピクチャレスク
- * 1790年代から1810年代のあいだにオースティンの“ピクチャレスク”への考え方が変化？

⇒オースティンのピクチャレスク観はなぜ？どう変わったのか？
⇒“ピクチャレスク”な風景とは？

事前学習で読んだ論文のなかで、幼いジェイン・オースティンがピクチャレスク論に夢中であったことを知る。しかし、前半の作品ではピクチャレスク的描写があるのに対し、後半の作品には見られない。ここからオースティンのピクチャレスク観が何をきっかけにどう変わったのかを調べることにした。また“ピクチャレスク”な風景がどのようなものかについても調査する。

◎ピクチャレスク (Picturesque)

- ・主に18世紀イギリスで用いられた庭園美学の概念
- ・文字通り「絵のような/絵になる」風景

William Gilpin [1724-1804]
ピクチャレスクを一つの美的範疇として人々に認識させた
(例) 変化が少なく滑らかな丘の重なり ✖
地形が不規則で岩肌がゴツゴツし、陰影のコントラストが強い ○

【イギリス風景庭園 水と緑と空の造形】より引用

“ピクチャレスク (picturesque)” とは主に 18 世紀イギリスで用いられた庭園美学の概念で、文字通り「絵のような」美しい風景という意味。特にオースティンが傾倒した William Gilpin はピクチャレスクという考え方を一つの美的範疇として人々に認識させた。

FW研究テーマと研究方法

- ①ジェーン・オースティンのピクチャレスク美学への考え方を探る
→ Jane Austen Centre 訪問
スタッフへのインタビュー
- ②ピクチャレスクな風景とは何かを探る
→ ナショナルトラスト管轄の garden や park 訪問・見学
インタビュー

研究テーマ・研究方法は以下の通りである。

Jane Austen Centreでの調査(女性スタッフ2名)

オースティンの自然への考え方に関する詳細な資料はなし

1 Did she like the "picturesque" landscape?

- She often talks about "picturesque" in Northanger abbey and sense and sensibility especially.
- She would be a very highly of picturesque writer.

2 Did her think about "picturesque" change?

How/Why did it change?

- She was very very inter-nature.

風景式庭園の成立過程

I ウィリアム・ケント

整形式庭園から風景画のような庭園へ
(古代イタリアを手本)

II ランスロット・“ケイバビリティ”・ブラウン

簡素・単調・大規模な「改良」(イギリスの自然を手本)

「恐らく彼は忘れられてしまうのではないだろうか。あまりに見事に自然を真似たものだから、彼のしたことは自然そのものと思われてしまうだろう」

ホレイス・ウォルポール『近代造園史』(1780)

III ハンフリー・レプトン

ブラウンを継承

考察・まとめ(見学・インタビューから)

- “ピクチャレスク”な風景は美しい
⇒しかしありのままの自然とは異なるもの
- 芝生の存在は生活に重要
→英国独特の気候と関係?
- 日本庭園の要素が見られるところも
→似た価値観を持っている?
- 一つの敷地のなかにもいわゆる庭園らしく丁寧に整えられた庭、雑然とした牧場のような庭、ありのままの自然に近い庭がある
⇒それぞれの場所に意義がある?

追加研究

- 「・・・風景式庭園は自然を模範にとったが、ブラウン以降は逆に、風景式庭園をモデルにイギリスの自然風景が整備されていったとも言えるのである。」
- 「私たちが「イギリス的な風景だ」と思っているの絵葉書や版画でおなじみの田園も、実は大部分がブラウンやレプトンの風景を念頭に置いて作り替えられた自然であるといったほうが正しいかもしれない」

中尾真理『英国式庭園 自然は直線を好まない』p147

「ピクチャレスク」な風景≠イギリスのありのままの自然
イギリスの象徴

Jane Austen Centre を訪問し、見学やスタッフへのインタビューを行った。

質問1「彼女は“ピクチャレスク”な風景が好きだったか」の質問にはスタッフ二人が Yes と答え、根拠になる描写箇所を示してくれた。質問2「彼女の“ピクチャレスク”に対する考えは変化したか」の質問には分からないという回答で、調査したいことが明確に出来なかった。

もう一つのテーマ“ピクチャレスク”な風景がどのようなものであるかを調査するにあたり重要である風景式庭園の成立過程に大きく関わったのが以下の三人である。以降、イギリスの滞在期間に訪れた garden や park の説明、分析。

現地での見学・インタビューを通しての自分なりの考察とまとめは以下の通りである。特に研究テーマの“ピクチャレスク”な風景については、好みはするがあまりのままの自然とは異なるものという認識を持っている人が多く、どちらが良いかという質問には頭を抱えてしまう人もいた。

帰国後、追加研究として読んだ文献のなかに以下のような記述があり、英国を象徴するような“ピクチャレスク”な風景が、必ずしも英国のありのままの自然と一致するわけではないことが言えると考えた。

参考文献

- 丹治愛 (2014)「ジェイン・オースティンの風景論序説 ピクチャレスクからイングランド的風景へ」
- 田路貴浩 (2000)『イギリス風景庭園 水と緑と空の造形』丸善株式会社
- 中尾真理 (1999)『英国式庭園 自然は直線を好まない』講談社
- 各施設パンフレット

参考文献は以下の通りである。

VI. 140099 浦松良多

映画「トレインスポッティング」から分かること



加藤ゼミ 3年 浦松良多

自分は夏のフィールドワークに参加しなかったため、以前から興味があった映画「トレインスポッティング」について分析した。以下では、今回の研究で得たものを綴っていく。

目次

- ①テーマ設定の動機
- ②トレインスポッティングとは？
- ③鑑賞、また、調べて分かった事
- ④まとめ
- ⑤参考文献

目次

①テーマ設定の動機

・卒論で何かしらの映画について研究したいと考えており、研究の際のアプローチを身につけるため

・本作からスコットランドの当時の時代背景等を学ぶため

・演出等を学ぶため

テーマ設定の動機

- ・映画研究の際のアプローチを身につける
- ・スコットランドの当時の時代背景を学ぶ
- ・演出等を学ぶ

以上の3つが主な動機である。

②トレインスポッティングとは？

監督：ダニー・ボイル

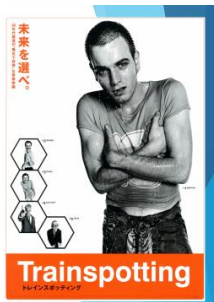
公開 1996年2月23日

製作国 イギリス

上映時間 94分 (R指定)

原作はイギリスでカルト的人気を誇るアーヴィング・ウェルシュの同名小説

スコットランドを舞台にヘロイン中毒に陥り、行き場のないスコットランドの若者たちの生態を、斬新な映像感覚で生々しく描いたドラマ。



監督はイギリスの労働者階級出身のダニー・ボイル監督。

「トレインスポッティング」は低予算で作られ、ダニー・ボイル監督の出世作となった作品。

③鑑賞して、また、調べて分かった事

1. タイトルの意味
2. ストーリーの特徴
3. 特徴的な演出

鑑賞して、また、調査して分かった事を綴っていく。

1. タイトルの意味

- ▶ 「トレインスポッティング」
- ▶ 直訳・電車を通るのを見つける事、鉄道ファン
- ▶ 実際の意味・鉄道の操車場にドラッグを注射しにいく人達を「奴らは鉄オタだ」とジョークにしたのが、タイトルの由来

「トレインスポッティング」というタイトルの意味を調べた。

本来の「鉄道ファン」という意味ではなく、「ドラッグを注射しにいく連中」という意味の隠語として使われている。

2. ストーリーの特徴

- 『映画のテーマ』・・・周りに流される中で、いかに「自分の生き方」を見つけるか
- 『ダニー・ボイル監督のテーマ』・・・当時の若者や、若者の自国やイギリスに対する考えを描く
- 『撮影方法』・・・
 - ×ドキュメンタリー風な撮り方
 - ポップな演出

映画のテーマ、ダニー・ボイル監督のテーマ、そして、それらを実現させるための撮影、演出方法について記述。

3. 特徴的な演出

- ①若者は総じてスコットランド訛りがひどく、スラングを多用する
- 例 シット→シャイト (発音)
アイム スターピング→アイム リーマーミン (スラング)

本作の肝となる演出、スコットランド訛り、スラングについて記述。

主要なキャストはスコットランド出身の俳優が起用されている。冒頭20分はアメリカの観客が理解できるように訛りを和らげたセリフを再録音しなければならなかったというエピソードがある。

3. 特徴的な演出

②時間軸の交差

- (例) ・冒頭のシーンが物語の終盤であり、そこから遡っていく
- ・会話の中に出てきたキーワードを説明するために過去に戻る

時間軸の交差はダニー・ボイル監督の他の作品でも顕著にみられる

時間軸が交差するというダニー・ボイル監督らしい演出が採用されている。

3. 特徴的な演出

③ドラッグ体験の映像化



ヒロインを摂取し、地面に沈んでいくといった主人公の体験する感覚を描くために、実際に主人公の目線で地面に沈んでいくといったカメラワークが採用されている。

3. 特徴的な演出

④「時計仕掛けのオレンジ」からの影響

- ・主人公の家での立ち振る舞い
- ・トレインスポッティングのナイトクラブのセット
時計仕掛けのオレンジのミルクバーのセット



「時計仕掛けのオレンジ」に影響を受けている描写について説明している。

まとめ

- ・スコットランドの当時の若者が抱いていた気持ちや状況がよく分かった
- ・演出等を深く学ぶことができた
- ・外国映画の研究は、情報源が少なく、あったとしても英語で書かれている事が多いので難しいという事が分かった。
- ・小説が原作であるという事なのでぜひとも読んでみたいと思った。

スコットランドの当時の時代背景を深く学べた。また、ダニー・ボイル監督の特徴的な演出や、映画研究のアプローチ等も学べた。

原作小説も読んでみたいと思った。

参考文献

- ・トレインスポッティング・シネマライズ オフィシャルサイト
www.cinemarise.com/theater/archives/films/1997002.html
- ・トレインスポッティング・ワーナー・ブラザーズ公式サイト
warnerbros.co.jp/home_entertainment/detail.php?title...
- ・『トレインスポッティング[R指定]』 <予習編>
町山智浩の映画塾！
- ・『トレインスポッティング[R指定]』 <復習編>
町山智浩の映画塾！
- ・トレインスポッティング - allcinema
- ・トレインスポッティング - KINENOTE

以上が参考文献である。

**The importance of socialization
in a different culture**

- I will focus on telling what I gained from socializing myself in a different society.

I realized the importance of socialization through my experience in the U.S. I will focus on what I did in the U.S, which finally made me think about the theme of this presentation.

Contents

- What benefit can we get from “socialization”?
- What I actually did while I was in San Francisco
 - Joining some events held anywhere in San Francisco
 - Living in a startup house which there are a lot of people from all over the world.
 - Traveling around alone
- Summary
- Conclusion

Here are the contents that I will tell.

What benefit can we get from SOCIALIZATION?

- Concept of SOCIALIZATION for me
 - Before
“Socialization” is to hang out with friends or communicate with people.

↓

- After
“Socialization” is to take part in community I live and interact with people and to know a background or a culture



This slide shows how my concept to “socialization” had changed through my experience.

It was a big change for me and it changed my mindset toward interacting with people.

What I actually did while I was in San Francisco

- Joining some events held anywhere in San Francisco

There are a lot of events held in each city in the U.S to meet new people or to know, share and discuss what you are interested in with them. I mainly joined a language exchanging event held weekly. In the event, people who are interested in Japanese and English as a language or their culture, and want to learn with native speakers for exchanging languages and culture.

-Main benefit -
I could not only make a lot of friends, but see the value of Japanese, a country which have formed who I am by seeing foreigners having interests in and studying it.

I am introducing three main socializations I did in San Francisco. First, I joined language-exchanging events. It made me objectively see and realize the value of Japanese.

- Living in a startup house which there are a lot of people from all over the world.

In the U.S, it is more common to share a space to live in the same house than Japan. I start sharing a house with 10 or more people. There are a lot of people who come from Asia, Europe, Africa, South America or any part of the world. I can share anything with these roommates.



-Main benefit-

I could know different cultures by living together with people who have different background including me by seeing their way of living.



I lived in a start-up house, where a lot of people from all over the world gathered. I realized and knew different cultures, actually sharing our space physically and mentally.

- Traveling around alone

Using last two weeks in the U.S., I traveled to some cities in the U.S. alone to measure my capacity to communicate with people and to make sure that how much I could understand the importance of "socialization". I went to Portland, New York, Washington D.C., Los Angeles and Seattle. And I stayed in Hostel, where a lot of people from all over the world stay with some different purposes.



-Main benefit-

I could know how important and how amazing meeting with new people and becoming friends are, which I rarely experienced in my country.



I travelled around a few cities in the U.S alone. I could make a lot of friends and they became one of my best friends. I realized how important and amazing meeting with new people is.

Summary-Putting these there socializations together -

Benefits from socialization

I could...

- Make a lot of friends from all over the world
- See the value of Japanese, a country which have formed who I am by seeing foreigners having interests in and studying it, which gave me a chance to look back at who I am.
- Know different cultures which I had not experienced so far.
- Know how important and how amazing meeting with new people and becoming friends are.

Here is the summary about what I felt from these socialization experiences.

These tell me a good lesson.

Conclusion

- My concept to "socialization" changed better through what I actually practiced and experienced.
- The concept I gained through my experiences might change because these are only one situation I happened to meet.

Therefore, I will keep thinking about "socialization", basing on my experiences.

I concluded my experiences.

Finally, I realized that my concept to "socialization" would keep changing and "Socialization" would be essential for me to make myself better.



The End...

How to be Aussie

-What I learned from teaching Japanese to the students and having lived among them-



I went to Australia to learn the English and their culture. In order to get them, I worked as a Japanese teacher at the secondary college.

Process


- 1. What I generally had done in Australia as a Japanese intern
- 2. What I taught them and also learned from them.
- 3. How I can utilize that experience.

Here is the process of my presentaton.

1. What I generally had done in Australia as an Japanese intern.

- (1) Teach Japanese as an intern

In Australia, students need to learn one foreign language. The system is called LOTE(Languages Other Than English). In the school I had taught, they can choose from Indonesian or Japanese.



Talking about why students learn Japanese as their learning language in Australia.

Most of them choose Japanese because they get interest in the Manga and Anime culture.

1. What I generally had done in Australia as an Japanese intern

- (2) Worked as a **TEACHER** for the first time even among Australians.

The meaning of 'teacher' contains jobs beyond teaching Japanese

If students have caused problems such as bullying, injuries, bad behaviors, I needed to deal with the problems. Sometimes it's very difficult to judge.



My desk

Lively students

I had worked not only as an intern, also as a 'teacher'. It means I also needed to manage students behaviour and disciplines.

2. What I taught to them and also learned from the students and teachers.

• (1) What and how do we teach Japanese to foreigners?

→ We can't use Japanese. So we need to speak English in order to teach. Thus we need both skills of Japanese and English.

• (2) How hard is to teach own language, JAPANESE.

→ If we are used to it, it's not too hard actually. Because we are Japanese. Once we have completed understanding Japanese grammar, expressions and words, we just teach them in English. But it surprisingly takes a little bit long time even we are Japanese.

This is about how I taught Japanese to them and how hard teaching own language is. I wanted to study English not Japanese, but I needed to study Japanese first. Because I didn't know much about Japanese grammar and words and expressions.

Y7-Y9 General and basic stuff

Remembering Hiragana, Katakana and basic words such as house things(たたみ, だいどころ, ちゅうか), animals(いぬ, ねこ, とら), numbers(いち, に, さん).

Introduce themselves in Japanese(わたしはnameです。numberさいでしゅみはsomethingです。)

Y10,11 Additional and harder stuff

Organise sentences in Japanese using 20 different grammar patterns. Listen to native speakers(teacher or listening record), answer the questions. Need to complete 120 different kanji.

Y12 Really difficult and sophisticated stuff

Students have gotten two final exams in the end of the year. One is called とくべつけんきゅう(oral exam) and the other is a writing and listening exam. They spend most of time for the exams.

Here is the example of their learning levels and tasks they must do. Japanese is a pretty difficult subject thus a large number of students don't keep studying until Year12.

The example of Y12 studying

One Student's answer

Q. どんなペットですか。

Aはい、二ひきの犬がっています。それらちさくて、かわいくて、よくいっしょにあるいています。チャーリーとエディと言います。

Correct answer

Q. どんなペットですか。

Aはい、二ひきの犬をがっています。それらはちいさくて、かわいくて、よくいっしょにあるいています。チャーリーとエディと言います。

This is the example about the Year12 studying. The students are required to use a lot of Japanese skills for writing essay, oral exam, listening exam. Especially, this kind of making sentences in Japanese is very difficult for them.

The example of Y12 studying

①When you have something, you need to say : peopleはsomething をverbています。

②When you talk about specific stuff, you need to put は after the subject.

③If the word has same vowel sounds, just make sure not to forget put a vowel sound :like おおきい、ちいさい、くうこう、etc...

This is the definition of the example. I needed to explain about this sort of things to them in detail.

- ① At first, teaching, even understanding their question was really hard for me.
- ② Then noticed that I need to know about Japanese first.
- ③ As studying Japanese, My English was unintentionally getting better.
- ④ I gradually came to understand what they say.
- ⑤ I didn't know anything about slangs and bad expressions, so I started learning those words as well in order to understand completely what they say.
- ⑥ Lots of mates said "You are like Aussie!"

This is the process of how I improved my English skill. It took so long time to get it, even though it looks pretty easy.

3. How I can utilize that experience.
- (1) I could work as a Japanese teacher and I succeeded it.
 ➡ Learned how important responsibility is.
 - (2) I could notice that learning Japanese definitely made my English better.
 ➡ I speak Japanese with Japanese but I also think about things in English.
 - (3) I've got a choice to live in Australia which is one of my dream :)
 ➡ Maybe it would happen after I've retired a job!

This is the conclusion of the presentation. They are about how important responsibility is, importance of learning own language, having gotten a new choice where I live.

4. Results of “Brexit” Interviews

3週間のうちに訪れた Bath、Oxford、London の3都市で Brexit（イギリスの EU 離脱）について賛成か、反対かのインタビュー調査を行った。イギリスほか8か国、合計43人にインタビューをした結果・内容を下に記す。

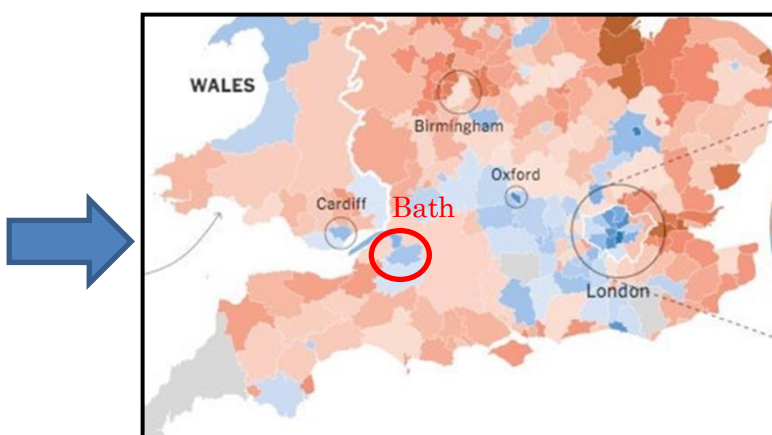
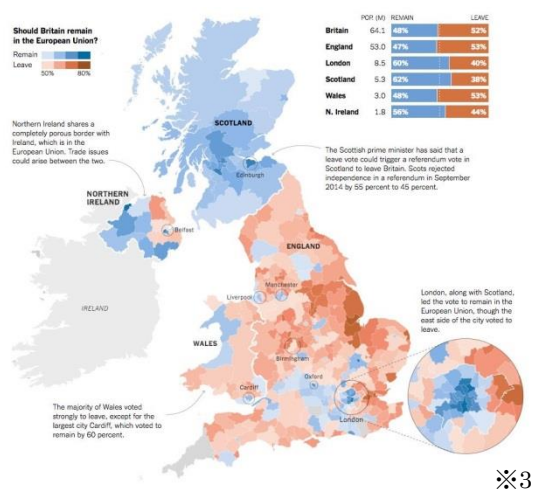
○導入

- Brexit=Britain+Exit
- 2016年6月23日英国で行われた EU からの離脱の是非を問う国民投票（EU Referendum）
- 51.9%Leave、48.1%Remain で離脱が決まった



○インタビュー結果

賛成：8人 反対：33人 不明：2人
(男性：16人 女性：27人)



拡大図から、私たちが訪れた3都市は反対派が多いことがわかる

地域ごとの賛成・反対を色別に分けた地図
賛成：赤 反対：青

○主な賛成意見

- ・イギリス独自の決定がしたい⇨現状では EU の同意が必要
- ・日本みたいにひとつの国として独立したい「EU のイギリスではなくイギリスはイギリスだ」
- ・毎年 EU に大金を支払っているのが嫌だ

○主な反対意見

- ・政府に対して
「政府がよく考えていないから大体の人が不安に思っている。以前政府は市民に嘘をついていた」
「進行が早すぎて考えることができない。決断が早すぎた」
「Brexit の問題は簡単に解決できない。長い目で見なければならない」
 - ・EU 加盟国との関係について→複雑になってしまう
「家族が EU 加盟国にいるから別れるのが悲しい」
「今は輸入品が安いけど関税が高くなってしまう」
- “**free movements**”：今まで EU 加盟国という枠で 28 カ国自由に行き来できていた。
→ Brexit 後は日本、中国などその他の国と同等の扱い
「EU 加盟国の人たちがイギリスに留まることも難しくなる」
「EU の国で仕事を続けられるかもわからない」

○不明意見

「どちらが良いかわからない、決めづらい」

○詳細

賛成意見

番号	性別	年齢（推定）	出身	理由
1	男性	50 代		<ul style="list-style-type: none"> ・家族は残留派だったが自分は離脱にいた。 ・イギリスは Great Britain だと思う。
2	男性	60 代	Manchester	<ul style="list-style-type: none"> ・日本みたいにひとつの国として独立したい。 「EU のイギリスではなく、イギリスはイギリスだ！」
3	男性	30 代	America	<ul style="list-style-type: none"> ・イギリスが再び強い国になれるチャンス。このタイミングで離脱するのが良いかはわからないが、離脱は良いことだ。
4	男性	23 歳	Northampton	<ul style="list-style-type: none"> ・離脱しても戦争は起こらない。 ・若い人は消極的で受身だ。
5	男性	60～70 代	Australia 出身、 Oxford 在住	<ul style="list-style-type: none"> ・EU からイギリス政府へ指示されたくない。 ・EU は無能（共同体的に無関心）。 ・毎年 EU に何ビリオンもお金を払っている。 ・イギリス独自の決断がしたい（貿易など）。⇨現状では EU の同意が必要。

6	男性	60代		理由は不明。
7	男性	50～60代		
8	男性	23歳	Gloucester	

反対意見

1	女性	30代	Edinburgh	<ul style="list-style-type: none"> ・悲しくてひどいこと、悪い夢だ、憂鬱にさせる。 ・EUは一つになるべきなのにばらばらになるのが悲しい。 ・家族がEUにいるから別れるのが悲しい。
2	女性	30～40代	England	<ul style="list-style-type: none"> ・政府がよく考えてないから大体のひとが不安に思っている。 ・以前政府は国民に嘘をついていた。何が起こるかわからない、緊張している。 ・他のEU加盟国から来たひとが一番不安に思っている。
3	女性	40～50代		<ul style="list-style-type: none"> ・クレイジー、ばかげている。 ・EUは問題があるけどそれを対処しなければならない。 ・EUの問題だけでなく他にも問題がある。
4	男性	30代	Bristol	<ul style="list-style-type: none"> ・悲しい、望んでいない。しかし自分達以外の人には利点がある。←イギリスに旅行しやすくなる、留学者が来やすく教育面においてもメリット。
5	女性	20～30代	Poland	<ul style="list-style-type: none"> ・よい考えではない、留まるべき、なぜ離脱したいのかわからない。 ・イギリス政府だけにとってはいいことかもしれない。 ・進行が早すぎて考えることができない。
6	女性	20～30代	Spain	<ul style="list-style-type: none"> ・よい考えではない、私にとってもよくないしイギリスにとってもよくない。 ・今は輸入品が安いけど関税が高くなってしまう。 ・すべてが悪い方向に、これからどうなるかわからない。
7	女性	50～60代	England	<ul style="list-style-type: none"> ・悪い考え。 ・文化的、教育面においてもEU間での協力は重要なものである。
8	女性	60～70代	Wales 出身、 England 在住	<ul style="list-style-type: none"> ・いいことじゃない、混乱している。 ・第二次世界大戦のときまではヨーロッパの国々は戦争をしていたけれどその後40年間はEUのおかげで平和だった。 ・同じテーブルで色んな国の人と話せたけど抜けてしまうのは悲しい。
9	女性	50代	France	<ul style="list-style-type: none"> ・悲劇的、悲しい。 ・EUはイギリスにとって最も良い場所。戦争を避けることができ、環境問題についても協力することができる。

				<ul style="list-style-type: none"> ・ EU は学生にとって最もよかった。←ERASMUS EU のおかげで加盟国内で勉強、旅行、探索ができた。 “Shooting yourself in the foot” ・これから経済がもっと悪くなる、日本に帰ったら私たちが反対していることを伝えてほしい。
10	女性	40～50代	Australia	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5年前にイギリスに来て3ヶ月前にイギリス市民になったばかり。←永住権？ ・ 悲しい、EU のままであることがとても大切。
11	女性	20代	Cornwall	<ul style="list-style-type: none"> ・ Terrible ・ EU の国に行くにももっとお金がかかってしまう。 ・ EU 加盟国との関係をより複雑にしてしまう。
12	女性	20代		<p>“Not happy, not good for trading”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ヨーロッパの人たちが今よりもっとここ（イギリス）にとどまれなくなってしまう、自由に行き来ができなくなってしまう。
13	男性	20代		<ul style="list-style-type: none"> ・ 超反対。 ・ EU にいけば EU 圏内どの国でも行ける、それができなくなってしまう。
14	女性	30～40代	Italy	<ul style="list-style-type: none"> ・ イギリスは EU に大きな貢献をしていた。抜けてしまうと経済が一番影響を受けるだろう。 ・ イギリスはただ EU に対して抗議をしたかっただけ、本当に離脱したいとは思っていないのではないか。 ・ 今まで EU 国という枠で行き来できていたがこれからは日本、中国などその他の国と同じ扱いになってしまう。
15	女性	20代	Italy	<ul style="list-style-type: none"> ・ Bad decision, awful ・ EU を離脱するのではなく、関係をより良い方向に築いていくことが大切。
16	男性	60代	King's Lynn	<ul style="list-style-type: none"> ・ Angry、住む場所が限られているのにどうして離れようとするのか。
17	女性	20代		<ul style="list-style-type: none"> ・ EU を離脱するべきではなかったけれどイギリスは強いから一国になってもやっていける。
18	女性	20代		<ul style="list-style-type: none"> ・ 良いことではない。 ・ 今までは自由にヨーロッパを回ることができていた。
19	女性	20代		<ul style="list-style-type: none"> ・ Bad subject ・ 若い人たちは結果を不満に思っているが年配の人は Great Britain だと思っている。 ・ イギリス人であることは嬉しいけど離脱には困惑。
20	女性	30代	Northampton	<ul style="list-style-type: none"> ・ 悲しい、イギリスにとって良くない状況。

21	女性	40代	Durham	・ショック。旅行することが好きだから自分にとってネガティブなことである。
22	男性	20代	Wimbledon	・決断が早すぎた。
23	女性	20代		・離脱が正しい決断だとは思わない。
24	女性	30代		・不幸なことだ、失望している。
25	女性	40代	North East	・ショック、離脱は良くないことである。
26	男性	30代	Scotland	・イギリスは過去の栄光があるから独立してもやっていけると思っている。 “We were powerful! Looking back history” ・今はEU圏内28カ国を自由に行き来できる。 “Free movement” ・Oxfordの70%は反対している。 ・Brexitの問題は簡単に解決できる問題ではなく、長い時間の中で考えなければならない。 ・賛成派の人は何に投票したのかわかっていない、何かが変わるだろうという安易な気持ちで投票している。 ・Brexitの本当の意味を誰も理解していない。 ・EUの国で仕事を続けられるか仕事を失うかわからない。
27 28	女性 2人	60代	Winchester	・ヨーロッパが好き、EUにいればほかの国に行き来できる。
29	女性	20代	German	・EUを離脱するとEUとの関係が悪くなる。→このままのほうが良い（マーケティングの面においても）。
30	男性	50代	German	・イギリスの政治の歴史の中でEU離脱は大きな決断。 ・賛成か反対かは言いづらいが反対。
31	女性	20代	Oxford	・EU離脱は良くないことである。 ・EUに残ったほうが強くなれる。
32 33	女性 2人	20代		・他国の友達と離れてしまう。 ・移民がいなくなって解決する問題じゃない。 ・イングランドの南側と北側でBrexitに対する意見が違う。 (南: Remain 北: Leave)

不明

1	男性	20代	Oxford	・民主主義が不満を言っている（からしかたがない？）。 ・どちらがよいか決めづらい。
2	男性	40代	Portugal	・Economic agreement にサインしなくてすむのなら離脱がいいことになる。 ・レイシズムの悪化、戦争にならないか不安。

○考察、結果に対する考え（全員の意見をまとめたもの）

インタビュー結果から賛成意見の方が抽象的で「Great Britain だから離脱しても大丈夫」などの意見が多く、過去にこだわっているような印象を受けた。実際賛成意見は年配の人が多く、10年、20年先を考えている若者の方が Brexit に対する不安が大きいのではないか、と考えた。インタビューで、離脱反対派も多かったのに離脱をしてしまったのは EU に対する不満や反発を示したかっただけなのではないかという意見も多かった。しかしそれだけイギリス社会が抱えている問題が軽視できるものではなく、ただ「勢いだった」で片づけずにもっと細かく見ていく必要があると感じた。また、EU加盟国の人たちにも意見を聞くことができ、自国の事ではなくても Brexit の影響を考えている人が多数であったため、イギリス一国の問題ではないということを改めて実感することができた。

今回インタビューをしてみて、賛成意見についてあまり情報を得られなかったということが課題であると感じた。また、今回話を聞いた人はほとんどが中産階級の人たちであるのではないか、ということから階級によっても意見が異なってくるのか、という疑問も生まれた。大英博物館で2人の男性に話を伺ったとき一人は賛成、もう一人は反対で途中から口論になってしまっていたのがとても印象的であった。家族は反対だったが自分は賛成に票を入れたという意見もあったことから親しい関係であっても Brexit に対しては別問題であるのだな、ということがわかった。外国の人々に英語でインタビューをすることは本当に勇気があることであったが、頑張って話しかけることで貴重な意見を聞くことが出来たので、英語があまり得意でなくても積極的に行動することが一番大切であると感じた。

画像出典

※1 : Public domain pictures. Net

<http://www.publicdomainpictures.net/view-image.php?image=165944&picture=brexit>

※2 : Cartoon Movement

<https://www.cartoonmovement.com/collection/126>

※3 : Brexit Referendum Results Map

<http://knowyourmeme.com/photos/1139583-united-kingdom-withdrawal-from-the-european-union-brexit>

5. The Diary

7/29(金)、7/30(土) 成田出発～Heathrow、Bath 到着

- ・ タイ空港にはイスラム教徒のためのお祈りの部屋があった。
- ・ ヒースロー空港には日本の空港よりいろんな人種の人がいる。
- ・ 店員や入国審査官がラフな感じで業務していた（喋っていた）。
- ・ ライフルのような大きな銃をもった警察官が空港にいた。
- ・ お店の従業員とか以外の人でもよく話しかけてくる。英語なら外国人でも通じると思っているのかもしれない。
- ・ バースは白人ばかり。
- ・ 観光地が中心に集まっている。緑が多く街並みも美しい。でもポイ捨てが多くゴミ箱は多いのに街にはごみが結構落ちている。

7/31(日) Bath 散策

- ・ スーパーがすごく安い。食料自給率が日本より高いのか EU のおかげか。
- ・ 営業時間が短い。17 時には閉店。
- ・ 本の値段が本屋によって違った。ハリーの誕生日だったためハリー・ポッターが半額になっていた。
- ・ 中国もイギリスも日本と大学の年数が違うらしい。
- ・ ウェルカムパーティーで中国人の子たちと話していたが、彼らの意識の高さに驚いた。英語がうまいし積極的。自分の英語が通じないことが多くて悔しかった。
- ・ 中国人と連絡先の交換しようとしたら中国人の友達たちは LINE をもっていなかった。
- ・ 基本的に豆とポテトを食べているのかな。
- ・ 洗濯機使づらい。表示もわかりにくい。

8/1(月) ELAC①

- ・ 今日から学校。
- ・ 大学までの乗車券を買うのに苦労した。行きの運転手さんは無愛想で何を言っても 2 ポンドとしか言ってくれなかった。
- ・ 朝からテストだった。クラスに日本人しかいない。他国の生徒を見習ってもっと積極的に発言していきたい。
- ・ バスが電車のように 2 つ連なっている。停車駅が上に表示されないのでみんな外をみて確認していた。
- ・ 夏とは思えない寒さ。もっと暖かい上着が必要だった。
- ・ 中国人の子たちは校内の探検課題をやらずネットで調べた方が早いからと全部ネット

で調べていたらしく意味がないと思う。

- 先生やカフェの人は EU の離脱について快く意見を聞かせてくれた。イングランドは離脱派が多かったといっても大学の先生だとやはりメリットとデメリット、EU の意義を考えているのだと感じた。
- 校内のカフェ店員はスペインとポーランドの移民だったが生活への不安から反対していた。こういう職種は移民が多いのだろうか。
- イギリス人は雨が降っても傘をささない。中には帽子をかぶる人がいるが意味があるのか疑問に思った。
- 自炊はまおちゃんがいってくれて本当によかった。ネットを使わず料理ができる人はすごい。

8/2(火) ELAC②

- 今日から 1 日フルで授業だった。
- 授業でイギリスの独特の文化行事について紹介していた。独特の風習や道具も多かったけど伝統的な物になると先生の祖母くらいの世代が使っていたもので今は使っている人はいない。
- Guest Lecture がバースの建築についてだったが意外と面白かった。

8/3(水) ELAC③

- 午後は Roman Bath へ歩いて向かった。
- Roman Bath は宗教的な要素が強い場所だった。2000 年たっても水漏れしないなど技術力もすごい。
- なかなか広くて疲れた。順番に見て回っていたけど出た時にはだいたい皆帰っていた。
- 途中で事前学習では見なかったけどナショナルトラストのマークがついた道があって後日中を歩いた。想像以上にナショナルトラストの所有する土地が多いと感じた。
- 食品は量が多く価格が安く、種類が豊富。

8/4(木) ELAC④

- 今日からプロジェクトがはじまった。Literature のクラスで日本人 3 人、中国人 3 人、イタリア人 1 人、コロンビア人 1 人だった。
- 中国人の自分をアピールする積極性に驚いた。
- 中国人はすごく携帯をいじっていてすぐ答えを探そうとしていた。
- Activity で Boules というスポーツを行った。小さな玉の目標に鉄製の玉を投げ、近づけるといふゲームである。会話が速くあまり聞き取れなかったがとても楽しめたので、スポーツも一つのコミュニケーション手段となるのだと思った。

8/5(金) ELAC⑤

- ・ プロジェクトで *Sense and Sensibility* を読んでのディスカッション。感想や自国、現代の文化と比べてどうかなど色んな意見があって面白かった。
- ・ 結婚：イタリアでは苗字は完全夫婦別姓。コロンビアでは名前を変えず子どもは父母両方から苗字をもらう。中国も夫婦別姓で苗字は変わらない。
- ・ 男女平等：イタリアでは男女完全に平等だが家庭では女の方が強い。中国では男女平等といいつつ実際には男の人の方が強い。コロンビアも男女平等。
- ・ 中国、香港、台湾の事情：それぞれ異なり、言語も違う。“1 Country, 2 Cities”
- ・ 本では女は外見が重視されるような描写があるが今は？：イタリアは若い男の人が美容に気を遣い、毛を全部そる。コロンビア人は中年男性でもマニキュアをぬる。
- ・ コロンビア、イギリス、イタリアでは男の人が髪の色を染めるのは変らしい。
- ・ 授業の後 Prior Park Landscape Garden にいった。道路にある矢印に従っていったがあまり頼りにならなかった。迷った。
- ・ 中はとても広かった。有名な橋は結構落書きがあって残念。
- ・ パークのスタッフ 1 人にインタビューしたけど全然何言ってるのか分からなかった。リスニングもスピーキングも至らない。
- ・ 帰りに 15 世紀に建てられたらしい小さな教会があって調べてみたら保護リストにのっているようだった。そんなに古い教会が住宅街にポツンと残っているのに驚いた。
- ・ イギリスで言う料理とは日本でいう料理とは違い、材料が少なく手間が少ない料理のことをいう。
- ・ Free Wi-Fi の設置率が高い。

8/6(土) Laycock へ

- ・ Chippenham で電車を降りた時改札がなくてどうやって料金を確認するのか謎だった。
- ・ 街並みが古く映画や物語の世界だった。観光客も多く、日本人も見かけた。
- ・ 自然が豊かでナショナルトラストが果たす役割はすばらしいものだと感じたが、維持費用が足りていないらしく、課題もあると感じた。
- ・ 昔の景観を残していてとてもきれいな村なのに、駐車場がないため路駐が多く、景観を壊している感じがした。普通の街でも路駐が普通なようで少し残念。
- ・ Laycock Abbey も庭がとても広い。
- ・ 修道院の名残りが強い回廊の方は神秘的だった。奥はカントリーハウスでもっと近代的だった。肖像画の年代がすごく古そうなものからあって歴史を感じた。
- ・ 最後の部屋は彫刻がすごかった。ドラマに使われた衣装なども飾ってあった。
- ・ 大学の先生たちは聞きとりやすくわかりやすい英語をしゃべってくれるけどインタビ

ューしているところとちょっと訛りがあったり全然聞き取れなくて、わかるときとわからないときの差が激しい。

- ・ お昼はクリームティーを初体験した。

8/7(日) Jane Austen Centre

- ・ オースティンセンターで当時の服装をして遊んだ。
- ・ ランチをしたレストランでとなりのおじいさんに話しかけられた。日本の経済や原発の話をして驚いた。日本人はこの手の話への関心が薄すぎるのではないだろうか。
- ・ 牛乳がすごく薄い。後日お店で紅茶についてきたミルクも入れたがやっぱり薄かった。チーズとか乳製品はおいしいのに。

8/8(月) ELAC⑥

- ・ イギリスのミュージシャンの Adele の動画を授業で見た。ロンドンの南東の方の訛りらしいが全然わからなかった。
- ・ 日本の有名なアーティストを聞かれたとき全然思い浮かばなくて自分の国について知らないことが多いと実感した。
- ・ 今日プロジェクトがあつてディスカッションした。自分の伝えたいことが全然伝えられなくて悔しい。
- ・ 中国では働くことが社会に対する責任だと考えられている。公務員になる割合が高い。
- ・ イタリアでは経済危機のせいでひとつの職場で長く働くことができない。
- ・ 中国では同じ社会的地位、経済レベルの人としか結婚できない。経済状況で家のドアの高さが異なるために同じドアの人みたいな表現をする。格差社会を感じた。

8/9(火) ELAC⑦

- ・ 午後はイギリス在住のフランス人作家の講演を聞いた。イギリスに住む海外出身者としてのアイデンティティ、Hybridity の話だったが Britany とイギリスの共通点などもおもしろかった。プロジェクトが一緒のイタリア人、コロンビア人と英語の発音が似ていた。
- ・ ゲスト講師への質問のときに、質問時間が決まっているのにいつまでも中国人が質問をやめなくて並んでいただけ全然進まなかった。日本人はあまり質問していなかったので積極的なのは見習いたいけど極端。
- ・ いつも同じ路線のバスを利用しているはずなのに、帰りの停留所がいつも違う場所になっている。ルートは決まっていないのだろうか。
- ・ 帰り Bath Spa Station でエンジンが止まったと思ったら運転手の休憩タイムだった。バスを下り、待合所のベンチで携帯チェックをしていた。スーパーも座ってレジを打っ

ていたり日本とは働き方が違うと感じる。

8/10(水) ELAC⑧

- 大学の駐車場に電気自動車の充電ができる場所があつて環境保護が進んでいるのかなと思った。
- 授業で教育制度について少しやったので先生に気になったことを聞いてみたら、高校までは先生のことは Mr. Mrs. Miss. をつけて呼び、大学ではファーストネームを呼ぶ、大学の中で偉い人だけ professor と呼ぶのでハリーポッターで先生全員に professor をつけているのは特殊らしい。
- イートンの話がでたので貴族はイートン等のパブリックスクールに通うのかも聞いてみた。お金があればとのこと。政治家はパブリックスクール出身が多く、知り合いだったり男だらけだったり問題になっている。
- イギリスでいう mansion は大きくて古いカントリーハウス。
- 午後はナショナルトラストの管理する Stourhead を訪れた。とても美しい風景式庭園で、正直 1 時間半の滞在時間ではまわりきれなかった。
- お風呂が汚いを超えて悲惨な状況になってきている。

8/11(木) ELAC⑨

- 最後のプロジェクトだった。 *Sense and Sensibility* にでてきた「収入が少ないために結婚は先になる」ということについて話し合っていて、その理由は今みたいに避妊薬がないから結婚＝妊娠となりお金がかかるから。
- 日本でも田舎に憧れる人たちはいるけどイギリスではやはりカントリーサイドの家は価値が高くとても高価。
- 授業で宗教について話したのでアメリカのキリスト教徒がハリー・ポッターを禁止して燃やしたというニュースについて先生に聞いてみた。イギリスではハリー・ポッターはどこでも手に入るし、クリスチャンだと答える人は多くクリスマスは祝うけど、教会に行く人は少ないなど日本人の宗教感覚と似ているので禁止になったりはしないと聞いていた。アメリカの方が厳格。イギリス人は教会の control の伝統を嫌っているということだった。

8/12(金) ELAC⑩ 最終日

- 今日は最後の授業だった。予習復習がメイン。2 週間あつという間だった。
- 先生が意欲が高く知識が豊富と褒めてくれた。英語ももっと頑張りたい。
- 午後 Bath Abbey に行った。ステンドグラスと彫刻がすごい。ステンドグラスに意味があるので聖書を知っていればもっと楽しめたと思う。

- ・ 街を歩いている時に **Hen Party** をしている家を見つけた。 **Hen Party** とは結婚前の女性が女友達と独身最後の夜を楽しむもの。
- ・ **Farewell Party** では、今まであまり話したことのなかった **ELAC** の人たちや中国人の子たちと話して、また英語力を向上させてから再び話したいと強く思った。
- ・ **Assistant student** の 1 人がゲイだと言っていたが楽しそうに話していて、日本よりオープンで寛容だと思った。
- ・ チキンが味は薄いのに辛すぎる。マックのチキンもすごく辛かったし舌がどうかしてるのではないか。

8/13(土) Oxford へ移動

- ・ **Oxford** まで電車で移動。指定席だったけどすでに座っている人がいたし大して気にしてなさそうなので別の空いている席に座った。お酒を飲んでいる人が結構いる。
- ・ 街並みはバースのほうがきれいだった。こちらの方が都会で賑わっている。
- ・ バースより黒人、インド系や中東系の人が多いように感じる。バースではイタリアやスペイン、ポーランドなど **EU** 加盟国からの移民がアルバイトしていることは多いようだったけど黒人はあまり見なかった。
- ・ 宿泊先のキーブルカレッジがすごくきれいで感動した。
- ・ 夜は *Peter Pan in Scarlet* をみた。内容は大筋しか分からなかったけどジャズっぽい音楽とパフォーマンスを楽しめた。原作の続編を元につくっているらしい。ピーターパンが自分勝手にわがままなところとフック船長に共感させるようなところは原作を踏襲しているように感じた。
- ・ 劇中のレスポンスが大きい。

8/14(日) Oxford 2 日目 Blenheim Palace

- ・ キーブルカレッジの食堂がハリー・ポッターのようで感動した。
- ・ ブレナムは **Palace** というだけあって敷地の広さ、壮大さは今まで見たカントリーハウスとは規模が違っていた。内装もきらびやかで華やか。
- ・ ナショナルトラストではイギリス人しか見かけなかったけど、ここは建物に入っただけにいる案内の人はイングランドの人だったが内部はアジア人が多かった。
- ・ 庭がとても広くいくつかのエリアに分かれていた。イタリア式庭園はきれいに刈り込まれてすごく人口的だった。バラ園も同じようにきれいに整理されているけどカントリーハウスの庭は広すぎるし森みたいだった。川まで作っているとは驚いた。
- ・ 午後は展示をみて夜に **The Eagle and Child** というパブでディスカッションした。初代チャーチルはスペイン継承戦争でフランスがヨーロッパの覇権を握るのを防いだ英雄で、首相のチャーチルはドイツが世界を支配するのを防いだ英雄だった。

- ・ 日本では戦時中の首相の功績を讃えるなんて信じられないし、敗戦国と戦勝国では戦争に対する考え方が全く違うと感じた。大戦後もイギリスは何度か戦争して勝利してきたから一層戦争の勝利を栄光とする意識がつよいのだろうか。
- ・ 勝ったのに領土を獲得できなかったのも今ではチャーチルの評価は下がりつつあるらしい。
- ・ ホームレスが多い。日本では追い出してしまう。

8/15(月) Oxford 3日目 College・本屋巡り

- ・ 朝食で high table に座れてうれしかった。
- ・ Christ Church、New College、St Mary と Merton College を訪れた。本屋は Black Well と Waterstones と Oxford University Press Bookshop を巡った。
- ・ Christ Church の Great Hall にいた案内の人にインタビューした。2周して別の人に聞いたがどちらも自分なりの考えを話してくれた。アリスについても色々話してくれた。:アリスが書かれた時代は科学が発達し始めたころで新しい技術は魔法のように思われていた。ルイス・キャロルも写真をとっていたがボタンを押したら写真ができるのは驚きだった(バレエ版のアリスで写真を撮った瞬間からワンダーランドに変わっていったのを思い出した)。また、アリスはウサギの穴へと落ちていくが、当時地下鉄が登場したころだったので読者は地下での冒険を読んでいて面白かった。
- ・ 案内の人はアジア人もいたけど白人が多く、掃除とかをしているのは有色人種が多い気がする。
- ・ 教会のステンドグラスは今まで見た中で一番すごかった。統一されたものでなく、1つの教会の中にも色味も全く違う色んなステンドグラスがあった。
- ・ EU についてのインタビューで初めて賛成意見を聞いた。本当の意見を言っているかは分からないけどイギリスは“Great” Britain だからという言葉は何回か聞いた。反対でも賛成でも困っている人はいたものの誰に聞いても答えてくれて、日本人より関心をもって自分の意見を持っているように感じた。
- ・ 本屋は児童文学のコーナーが日本より広いように感じる。絵本や日本という青い鳥文庫のような本だけでなくファンタジーや中高生向けなど含み広くスペースをとっていた。

8/16(火) Londonへ移動 Dickens Museum・大英博物館

- ・ 今日からロンドン。バス、オックスフォードとどんどん都会になっているが気温も都会に行く度あがっている気がする。タトゥーを入れている人もさらに増えた。
- ・ ディッケンズの家では中産階級の暮らしを見ることができた。使用人を雇えるかどうかの中産階級か労働者階級かの基準になっていたというのを思い出した。ここでは地下や屋根裏などでの使用人の暮らしについても少し触れられていた。

- ・ 博物館は基本入場料無料。
- ・ 大英博物館ではいろんな国のものがあるけどそれはすごかったけど権利がイギリスのものか微妙だし **Great Britain** だなと思った。
- ・ 大英博物館で働いている人は、インド系やアジア系、黒人系など今までに比べてもさらに豊かであった。スーパーで働いている人はおそらくイスラム系の人や黒人が多い。
- ・ インタビューをしようとしても働いているからと断られることが多くなった。

8/17(水) London 2 日目 Osterley Park & House

- ・ 地下鉄は暑くて空気がこもっていて狭く辛かった。
- ・ 今までのカントリーハウスより質素で優美な印象。
- ・ 部屋の説明が詳しく、地下のキッチンやハウスキーパーの部屋なども公開されていて使用人の暮らしも見ることができた。
- ・ ボランティアスタッフは話しかけると喜んで話してくれた。インタビューも答えてくれたけど部屋や屋敷に関して質問した時が一番楽しそうだった。
- ・ 庭でシャボン玉で遊んだ。ほかのカントリーハウスに比べて少し地味に感じたがこの庭も風景式庭園だったらしい。

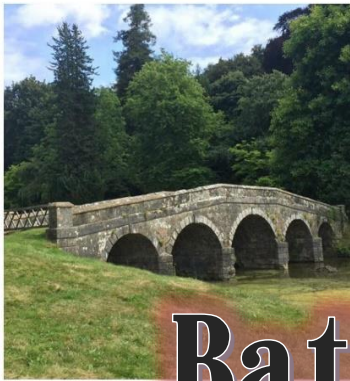
8/18(木) London 3 日目

- ・ 今日は 9 と 3/4 番線に行き、ショッピングをしてオペラ座の怪人を見た。キングスクロス駅ではカートの写真スポットの行列からもわかるようにいまだにハリー・ポッター作品が愛されていることがわかった。
- ・ フォートナムアンドメイソンでは白人の従業員が多く他は黒人が 1 人だった。
- ・ オペラ座の怪人は舞台装置がすごかった。テーマ曲の時のセットの移り変わりが特にすごい。このファントムは帽子をかぶっていたがシルエットがインパクトある。バレエ中にファントムの影が何度も映り込み首を縄にかけて傾げたあと死体が落ちてくるのがとても印象的だった。
- ・ フランスの話だからか最初にオークションで喋っている人はすごい巻き舌で喋っていた。スペイン系のプリマドンナ役も巻き舌。
- ・ ホームレスに子供や女性も多い。
- ・ 歩いてビッグベンとバッキンガム宮殿の前を通った。バッキンガム宮殿は見た目が意外と質素だった。中も入ってみたい。

8/19(金) Heathrow 出発～成田

- ・ 帰日もタイ空港経由。機内食が多すぎる。

6. Photos



Bath





Oxford





London





San Francisco





Manchester

7. Reviews

1. 140057 市橋若菜

3週間のフィールドワークは私にとってとても貴重な体験になった。ただイギリスの大学で英語を学ぶのではなく、FW参加各国の異文化を多く体感することができた。イギリスへ行く前に事前学習として調べることができ、単なる観光ではなく、その場所の歴史、特徴などについて理解を深めてから現地へ行くことができた。FWの中で、現地の人にインタビューをすることができた、というのが一番の経験であったと思う。自分の英語力の無さを痛感したが、私のつたない英語でも真剣に聞き取ろうとしてくれる現地の人への優しさに驚いた。自分の興味あることについてその場所へ実際に行き、調べるだけでは分からない、生の声を聞くことができて本当に良かったと思う。また、Brexitのインタビューも貴重な経験であったと感じている。日本のニュースではあまり取り上げられていない市民の不安を多く聞くことができた。インタビューをした際、「私たちがBrexitを反対していることを日本に帰ったら多くの人に伝えてほしい」という言葉がとても印象的であった。今回インタビューをしていなければBrexitの問題についてこんなに深刻に考えることもなかったのではないと思う。今回の経験を生かし、これからの研究を進め、今後もイギリスについてより多くの理解を深めていきたいと考える。

2. 140264 小林真紀

イギリスでのフィールドワークを通して貴重な体験をすることができた。今までゼミでの論文や文学の授業を通してイギリスについて学んできたが、実際にイギリスに行ってみて移民の多さや、戦勝国であることの価値観の違い、そして本の中の風景や歴史、建築など知識としてあったことが現地で見えてきて、納得できた。特にEUの離脱に関してインタビューを行ったことで今まで知らなかったEUの恩恵やイギリス人の自国に対する考え方がわかり、インタビュー結果からは年齢層や場所、教育の違いによる考えの差を読み取ることができた。自分の研究としてはカントリーハウスのイメージとイギリスの伝統についてインタビューを行ったが、カントリーハウスのイメージ自体が庭やファンタジーといった「イギリスらしい」と結びついていることがわかり、イギリス文化の研究として良い成果が得られたと感じる。

フィールドワーク全体を通してイギリスでの生活からは国民性や地域性を含め日本との違いを感じたが、生活風習の差ということにとどまらず、歴史や文化の違いそして考え方の違いを大きく感じた。それにより自分の価値観や考え方も日本の教育や歴史、一般的な価値観に左右されているのだろうと見つめなおす機会にもなった。この視点を忘れずに今後の研究や生活に生かしていきたい。

3. 140454 友永純菜

3週間の異文化体験は、私にとって貴重な経験でたくさんのことを学んだ。イギリスの料理は不味いというよりも味がなかった。日本と比較すると、公園などでゆっくり過ごしている人が多く時間の流れが遅く感じられた。食材も量が多く、一概に物価が高いとは言いきれないと思う。戦勝国と敗戦国では戦争の考え方が異なっている。人種が多様性に富んでいた。様々な分野で日本と比較できたことが今回の収穫だと思う。

そしてなにより、英語力の無さを痛感した。ロンドンについて初めて入ったカフェで苺シェイクを頼もうとしたところ、“strawberry”という単語が通じなかった。日本の小学生でも知っているだろう単語が通じないことは衝撃的だった。バースではその後も“girl”が通じなかったり、大学での授業で“L”と“R”の発音を指摘されたりした。正直ここまで指摘されると思っていなかったのととても悔しかった。この経験から、今までの英語学習法とは異なり、発音を意識した方法にしようとして試みている。つたない英語でもなんとかして聞き取ろうとくださった現地の方々には感謝しかない。成長したらもう一度イギリスに行って積極的にコミュニケーションをとりたいと思っている。

4. 140478 中村さくら

3週間の中で一番学んだことは文化を理解するという壁の低さであった。今回の研修が私にとって初めての海外であったので様々なことで驚いたことはたくさんあった。しかしその文化の違いにもちゃんとした背景があってできているということに気づかされ、自分が思っている以上に文化の違いは理由づけられていて理解できるものであると感じた。オックスフォードで訪れたブレナム宮殿では世界大戦勝利の栄光について展示してあり鑑賞した。そこではいかにしてチャーチルが戦争を勝利に導いたのか、背景が描かれていた。展示されていることも含めこの大戦の勝利というものはその後のイギリスの強気な姿勢を裏付けているように感じた。「歴史にもしくはない」が、もし日本が世界大戦に勝利していたら現在どのように位置づけられているのだろうと考えるときっと日本もこのように強気な姿勢を取り、栄光を称えているのだろう。今回の研修で **Brexit** についてのインタビューを行ったが、その中で「**Brexit** に賛成である。なぜならイギリスは **Great** な国だから。」という答えを聞いたことがとても印象的であった。その理由を聞いたときは **Brexit** について全然考えていないなと思ったが、今改めて考え直すと戦争の勝利という歴史がその人に強く影響しているのではないかと考えた。経済の問題ではあるが国民性も感じることができた。このように机上で学んでいる以上に文化の違いというものがある意味論理的で垣根を低く感じることができると考えた。このように考えることが出来たことが最大の収穫であったと思い、今後の研究では現地に訪れることはできないので文化を論理的に感じまたその地や人に思いを馳せながら研究していきたいと思う。

5. 140492 西迫真央

今回バース大学での研修や FW を通して実践的な英語能力の不足を感じた。読み書きできる単語でも発音が合っていなければ相手に伝わらず、意思の疎通が困難な状況がいくつもあったからである。また、他国から来ている生徒と共にサマーコースを受講するなかで積極的に発言することがとても重要だと思った。日本では受け身の授業が多く、「先生の話静静地に聞く」ことが当たり前になっており、それは日本人の良いところでもあると言える。ただ、このようにいろんな国からいろんな考えを持った人が集まる国際的な場においては、黙って聞いているだけでは、議論に参加しているとは言えないことを実感した。正しい・正しくないに関わらず、自分の意見を発信しようとする前向きな姿勢を持つことが、英語力・コミュニケーション力向上の近道であると思った。語学の面では反省が多いが、今回英国を訪れたことは自分の考えや価値観に良い刺激をもたらす機会になった。イメージにあった英国と実際のそれとのギャップを知ったり、英国の特色を知ることでかえって日本のもつ文化の良さに気付いたりすることが出来た。この経験は、今後の研究や卒業論文に取り組んでいくなかで重要な役割を果たすだけでなく、日常生活においても活かされていくものだと考えているので、英国で得たものひとつひとつを忘れないようにしていきたいと思う。

6. 140099 浦松良多

実際にフィールドワークには行かなかったが、事前調査やゼミ生の話を通じて、バース等に対するイメージに鮮明な輪郭を得ることができました。

学業におけるフィールドワークの重要性や、インタビューなどを通して得た生きた情報の有効性、事前調査がいかに大切かという事がよく分かりました。今後、チャンスがあればぜひともバースに足を運び、自分の目で確かめたいと思います。

また、夏休みに独自で行った、映画「トレインスポッティング」についての調査から、文献や資料集めの方法から始まり、原作と映画の比較方法など映画を研究する際に重要なアプローチや視点といったものを体得できたのではないかと思います。

また、映画や小説を取り扱う卒業論文には、作品によって、また、テーマによって文献や資料が少ないという困難が付きまとう事例が多く、早め早めの調査が必要だという事が分かりました。また、英語の文献をたくさん読む必要性が予想されますので、調査と同時に英語の学習にも多くの時間を割いていきたいと思います。

卒業論文に取り組む際は今回学んだことをフルに生かし近年稀に見る素晴らしい卒業論文を創り上げていく所存です。

7. 140322 Sawada Yoshinori

I chose the internship as a way to study English in a foreign country. The reason for this is that I had two things mainly I wanted to do during my stay in the U.S. One is to be able to speak English as natural as I can. And the other is to know how the business in the U.S is through the internship. My main job in my company was mainly to translate materials, documents or whatever should be translated. Actually, it helped me improve the skill to translate naturally and know a lot of English words I didn't know until then.

Regarding private life, I tried to socialize myself in American Society as much as I could. Especially, San Francisco is called "Melting Pot" which means the society is so diversified. Therefore, I could communicate with people from different backgrounds. And I lived in start-up house through almost all of my stay in the U.S. Thus my roommates motivated me a lot and made me realize how important connecting with people is. Eventually, It led me to make a lot of friends all over the world.

I am sure my experience in the U.S broadened my mind, seeing the world globally. Even after I go back to Japan, I should keep remembering the lessons I learned in the U.S.

8. 140510 Hadama Naoki

I have taken a gap year this year and had worked as a Japanese assistant teacher for 8 months. I decided to go to Melbourne, Australia, because I wanted to learn foreign culture and the English language from native speakers and also I didn't know much about Japanese language and culture. I had never been to foreign countries and there were no Japanese in the towns I had stayed thus it was extremely hard for me to be there at first actually. However, lots of people supported and took care of me so much. As a result, I gradually had come to be used to their culture and of course, to their English as well. I tried lots of things as much as possible and one day I realized that 'mistakes are proof that I'm trying.' It definitely changed my mind in going the right directions to get to my goal. My job was to help students in their pronunciations, check how correct their spellings and grammars were, set listening and oral exam papers. Also practicing a lot of flashcards, to marking their exams and even deciding on their scores etc. These tasks taught me how responsible educators are and how hard people (especially social workers) manage their time.

2016 年度
イギリス文学・文化論ゼミ
海外語学研修・フィールドワーク 報告書

2017 年 3 月 31 日発行

監 修 加藤 千博
編 者 横浜市立大学 国際総合科学部 国際教養学系 国際文化コース 加藤ゼミ 3 年生
発行者 〒236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2 加藤ゼミ
電話 045-787-2256
